

静岡藩の医療と医学教育 林洞海「慶応戊辰駿行日記」の紹介を兼ねて

Research Materials

樋口雄彦

はじめに

林洞海（一八一二～九五）は、幕末から明治にかけての蘭学者・西洋医であり、維新を挟み徳川幕府・静岡藩に仕えた後、明治新政府に出仕した経歴を持つ。本稿は、彼が主として静岡藩時代に記した「慶応戊辰駿行日記」（順天堂大学医史学教室所蔵）を翻刻・紹介するとともに同史料から判明した静岡藩の医療・医学教育の具体相について考察を加えるものである。

「慶応戊辰駿行日記」には、従来知られていなかった林洞海の個人的動向はもちろん、静岡藩の医療政策をめぐる新事実が多く含まれる。旧幕府が縮小・転化した静岡藩は、政治的変革を機に、静岡学問所・沼津兵学校の設置といった文教政策において、幕府時代には実現できなかった新制度を実施に移したが、医療をめぐる問題に關しても同様であった。近代的な藩立病院が設立され、西洋医学を身に付けた医師たちによる医療と医学教育が目指されたのである。静岡藩の先進的な教育制度はやがて人材とともに明治新政府に吸収されていくが、同時期に存在した同藩の医療制度や医師の役割についても、その達成度を計るとともに、

旧幕時代との違い、明治新政府への継承、地域への影響といった視点から検討を加える必要がある。学校制度をめぐる問題に關し筆者はすでに沼津兵学校を中心に検討を試み、病院についても言及したことがあった^{〔1〕}が、ここではさらにそれを深めたい。

史料の全文翻刻は後に掲げるが、その史料の中から見て取れる諸事実をその他の史料・文献とも突き合わせ、静岡藩の医療・医学教育に關する施策全体の中に位置付けていくことにしたい。静岡藩の病院・医師に關する概説としては、土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』があるほか、『静岡県史 通史編5 近現代Ⅱ』は徳川宗家文書の新出史料などを活用し叙述された。しかし、前書は各病院の沿革と医師の履歴紹介に重点が置かれ、その内実や意義についての言及は乏しい。後書は自治体史としての性格上、極めて簡略すぎるものである。そこで本稿では、「慶応戊辰駿行日記」を利用しながら、それらの先行研究を補完していくことを目的とする。

一 沼津陸軍医局・陸軍医学所の設立

第二節で一元化の問題について述べるように、当初、沼津の陸軍医局・

医学所（後の沼津病院）と駿府（静岡）の静岡病院とは、同じ藩立の医療機関でありながら全く別々に立ち上げられたものである。ここでは、まず沼津のほうの動きから見ておきたい。

林洞海は、沼津到着から二箇月以上を経た明治元年（一八六八）二月二六日陸軍総括服部常純（綾雄）より陸軍医学所御用重立取扱に任命し、御手当金四〇〇両を下されるとの辞令を渡された。実際には、杉田玄端を陸軍附医師頭取、洞海を陸軍医学所御用重立取扱に任命するとの辞令が駿府にて服部に手渡されたのは同月二三日付であった。⁽²⁾ 洞海の「慶応戊辰駿行日記」には、地元採用の相磯格堂は二月一七日「陸軍医師となる」とあり、また杉村行三（一〇月二五日）、永井玄栄（同月二八日）、荻生洪道（洪斎、十一月一日）、津田為春（同月八日）ら後に沼津病院医師となる者たちが洞海と往来していることが記されているので、杉田・林以外の医師たちの人選はすでに何らかの形で始まっていたものと思われる。洞海は沼津到着後から発令までの間、阿部潜・塚本明毅・矢田堀鴻・西周・大築尚志・赤松則良・川上冬崖・伴鉄太郎・服部常純ら沼津兵学校関係者とも行き来しており、当然ながら公私にわたる情報交換を行っていたであろう。それにしても兵学校の教授陣の任命が一〇月半ばかり始まっていたのと比較すると彼の任命は遅い。

そもそも慶応四年七月作成の移住予定者名簿「駿河表召連候家来姓名」（国立公文書館所蔵）には、陸軍以外から集めた人材を「陸軍用取扱」という肩書でまとめた中に、杉田玄端・池田謙斎・壬生玄豊・戸塚文海（静伯）・伊東方成（玄伯）・林紀（研海）・松本銈太郎・竹田玄庵・永田宗郁・津田為春・高島春庭ら医師たちが含まれていた。この点からも阿部潜ら陸軍局の幹部らは、兵学校の沼津設置と併せ、病院もしくは軍医養成機関の設立を目論んでいたことが推察される。旧幕府の陸軍には歩兵所医師取締・歩兵屯所附医師・歩兵大砲附医師出役が採用され、海軍には海軍所養生所が設けられ、軍艦附雇医師が採用されるなど、幕末段階にお

いて独自の医官の任用が始められていた。⁽³⁾ また、鳥羽・伏見敗戦後の混乱を受け、漢方の医学館は自然消滅して洋方の医学所に吸収された上、それも海陸軍附病院へと改組された形となっていた。⁽⁴⁾ そういった流れの上で、駿河府中藩の陸軍局が独自の軍医と軍医養成機関を持つとしたのは当然といえる。

しかし、右に挙げた陸軍用取扱の医師のうち、実際に沼津陸軍医局（後の沼津病院）の医師になったのは、杉田・津田のみであり、他の医師たちは静岡病院に回った林・戸塚・竹内、朝臣となり明治新政府に出仕した池田・伊東・松本らのように、そもそも沼津に移住しなかった者が多かった。九月には杉田と林に対しても新政府からの「御召状」が出ていたが、二人はそれを蹴って移住したらしい。⁽⁶⁾ 駿府病院医師の発令は一足早く十一月から開始されており、沼津よりも駿府のほうが優先して人選が進められた可能性がある。結果的に林紀・戸塚・竹内らは陸軍局から脱したことになる。そのあたりに杉田・洞海らの発令が遅れた理由の一端があるのかもしれない。

なお、林洞海の名が「駿河表召連候家来姓名」に掲載されていないのは、脱走軍に加わった松本順の後を受け頭取をつとめていた医学所が慶応四年六月一三日新政府軍に接收され、解任となった後、⁽⁷⁾ 一五日には隠居していたからであろう。

とにかく、沼津には陸軍附の医師団が常駐し、陸軍医学所が設けられ、医療活動と軍医養成が行われることとなったのである。沼津と同様に陸軍生育方の移住先となった田中では、十一月二四日陸軍御医師河島宗瑞が製薬掛を命じられたので城外四番長屋を御薬園として引き渡すようにとの布達が出されるなど、⁽⁸⁾ 陸軍局独自の動きが見られた。

元年一二月時点の役金・席次一覧では、駿府の病院頭・病院二等医師・病院三等医師とは別に、陸軍医師頭取・陸軍一等医師・陸軍二等医師・陸軍医師手伝という役職が設定されていた。⁽⁹⁾ なお、同年一二月頃の「駿

府御役人附」、二年正月の「御役名鑑」という木版一枚刷の藩役人名簿には、いずれも病院頭林研海と奥医師一六名のみが載っているだけで、陸軍医師のほうは誰も掲載されておらず、印刷に間に合わなかったものと思われる。

ところが、駿府（静岡）と沼津の二元的な病院・医学教育体制、つまり通常の病院・医師と陸軍医局・陸軍医師との別立て方針は、すぐに見直しされるのである。

二 静岡病院による一元化

二年（一八六九）正月二日洞海は杉田玄端・相磯格堂・荻生洪道らとともに駿府に向かい、四日に到着した。六日、病院頭林紀・同頭並坪井信良と洞海・杉田らが一堂に会し、病院出役医師・同陸軍医師の「エキサーメン」（試験・検査）が実施された。つまり、駿府病院と沼津陸軍医局とが合同で出役医師の採用検討会を開いたのである。沼津とその近村の地元医師であった相磯・荻生の二人はその考查を受けるために同行したわけである。

その後、駿府病院では、二年正月から二月にかけ、行政官の布告にもとづく領内の市在医師取り締まり布達、修復成った仮病院の正式な開業（二月二一日）と医学就学者の募集の布告、定期的な種痘の実施宣伝、市在医師取り締まりのため各所奉行を通じての明細短冊提出依頼などを矢継ぎ早に行った。⁽¹⁰⁾ 二年四月には解剖所、七月には製薬所が完成した。林紀はオランダ留学から帰国したばかり、また坪井信良・戸塚文海らは慶応三年（一八六七）には幕府の手で京都に大規模な病院を設立する計画で動いた経験があった。⁽¹¹⁾ 駿府での病院建設は幕府瓦解によって途切れた夢の実現でもあり、意欲満々であったと思われる。

これらの施策が沼津の陸軍医師たちの同意のもとで実行に移されたのか否かは不明であるが、いずれの布達の文面も富士川以東の陸軍局管轄

地域を例外視していないことからすると、この時点ですでに駿府病院は全領内の医療・医学教育をカバーしようとしていたように見て取れる。駿河国富士郡中里村（現富士市）の村医であった関家に残された資料に、木版による以下の二枚の刷物がある。⁽¹²⁾ 駿府病院がカバーしようとする範囲が富士川以東に及んでいた証拠かもしれない。

①

今般医学修業病者救助之為メ厚き思召を以病院御取建ニ相成来ル廿一日御開相成候ニ付而者町方在方之者ニ至る迄有志之者者其所奉行江申出奉行所添鑑を以致入門学術研究可致事

御家臣者勿論町方在方之者男女老少之無差別病苦有之候者願出候ハ、御医師立合診察相談之上療養差加候事

但御薬代者御場所江上納可致尤貧窮之者者村役町役ノ願書差出相違も無之候ハ、御施薬可被下候又御場所江罷出兼候病者者見舞可申候事

明治二巳年二月

駿府病院

②

規則書

一 毎日講義生徒教導之事

一 初而診察願出候者者御役名宿所姓名相認候手札差出可申事

但市中在方ノ願出候者者本人手札之外引受人手札相添差出可申事

一 薬種料之儀者毎月晦日上納之事

一 仮病院之儀者御場所手狭ニ付寄宿病人者預り不申候得共外療施術後

等模様ニ依り臨時一二泊為致候事

一 願出候病人者掛リ之医師一同立合診察相談之上配剤致候事

一 差向急症之外者診察調合毎日九ツ時限之事

一 他所病人者一等医師二等医師見舞候事

一 病院掛リ之医師自分病用者一切相断候得共自然私宅江頼来候分者診

察并見舞可申候事

明治二巳年二月

駿府病院

①の布告に従い、実際に富士川以東からも入門を願ひ出る者が見られた。駿東郡柴怒田村（現御殿場市）の村医瀬戸尚綱は同年三月、村役人を通じて神山仮役所（沼津郡政役所の出張所）宛に駿府病院への入門願書を提出している。⁽¹³⁾

一方、沼津の陸軍医局は二年三月一七日に「御開場」を迎えた。同時に、木版印刷による「徳川家陸軍医学所規則」が陸軍医局の名で発布され、兵学校と一体となった軍医の養成方針が打ち出され、また一枚刷の「医局告示・種痘弁」が配布された。陸軍生育方に所属する元陸軍兵士らに対しては、同規則書にもとづく医学入門希望者や医局製薬方手伝の募集が通達されている。⁽¹⁴⁾

ところが、医局開業の数日前、三月一日、陸軍学校（沼津兵学校）や陸軍生育方の名称から「陸軍」の文字を除くことが通達されていた。⁽¹⁵⁾翌月には兵学校頭取西周が既存の兵学科に文学科を加えた文武学校の体裁を整えるべく「徳川家沼津学校追加掟書」を起草する。「追加掟書」によれば、文学科の中には政律・史道・利用の三科と並び医科があり、「徳川家陸軍医学所規則」や後述の駿府病院「塾則」のものとは違う、独自の医科資養生・医科本業生の授業科目が表の形で明示されていた。⁽¹⁶⁾

沼津兵学校は静岡藩の武官と文官との両方の養成をめざすべく方針転換をしたのである。それに合わせ、陸軍医局も単に医局と称することになった。開業直前に急遽そうなったものと思われ、現存する「徳川家陸軍医学所規則」には、「陸軍」の二文字の上に貼紙をしたものがあるほか、「医局告示・種痘弁」には「医局」の前二文字分、つまり「陸軍」の二文字が削られ空白になったものもある。⁽¹⁸⁾

沼津兵学校（沼津学校）の脱陸軍化に歩調を合わせたものと考えられるが、病院の体制についても一元化が図られることとなった。二年五月

九日、洞海は服部常純・西周・藤沢次謙・立田彰信・塚本明毅・林紀らとともに沼津を出立、翌日駿府に着いた。その後静岡・沼津の幹部たちによる評議が行われたものと推測されるが、一日には「府中沼津両病院条約書」が出来上がり、二冊にそれぞれ押印の上、双方が保管することとされた。この条約とは、今後、沼津病院、すなわちそれまでの陸軍医局は駿府病院の支配下に置くという内容であり、翌日には統一的な医師の階級・役金額が明示された。一等医師・二等医師・三等医師・無級医師という階級であり、陸軍医師は廃止されたのである。

ちょうどこの頃、五月一〇日に出された坪井信良の実家宛書簡には、駿府病院の「塾則」二七箇条（含む講堂日課・食堂規則）、「病院規則」一二箇条が書き写されているが、果たして沼津のほうでも先の「徳川家陸軍医学所規則」をやめ、それを適用することになったのかどうかはわからない。少なくとも、医学童生・医学資養生という兵学校に連動した生徒の名称は使われなくなったのではないかと推測される。

先の条約書では既に沼津病院という名称が使われていたが、八月、沼津の医局は正式に沼津病院と改称した。⁽²⁰⁾名実ともに、陸軍局、すなわち沼津兵学校の附属機関としての位置を改め、あくまで駿府病院管轄の一病院となったのである。確定した陣容は、木版刷の役人名簿「沼津御役人附」や「静岡御役人附」に掲載されたが、後者で比較してみれば、沼津病院のスタッフは、頭取杉田玄端、重立取扱林洞海以下、二等医師一名、三等医師三名、三等医師並四名、その他（製煉方・馬医・調役など）であり、病院頭林紀、頭並坪井信良・戸塚文海以下、二等医師二名、三等医師二名、三等医師並四名、無級看病頭三名、無級牢屋掛二名、その他（調役・御薬園掛など）という駿府病院に対し、医師の布陣は明らかに劣っていた。⁽²¹⁾

一〇月二六日には病院頭並坪井信良が各所病院俗務取締を命じられ、

沼津病院をはじめ各地に配置された医師を巡回し管理することとされた。⁽²²⁾ 明治三年一月二六日付書簡の中で「東ハ沼津より、西ハ三州赤坂迄之処ニ、折々往復」、「駿遠三各地医生之取締、総テ御領分中医者之進退・黜陟、悉皆拙生之耳目ニ入候⁽²³⁾」と記しているように、坪井は領内を東奔西走する活躍を見せた。

後に沼津文庫と呼ばれることになった沼津兵学校・沼津病院の蔵書には、明治三年正月静岡戸塚氏より買入れた旨や林研海のローマ字サインが記入された医学・自然科学関係の蘭書が数点存在したことから、⁽²⁴⁾ 静岡・沼津間で書籍の融通などを行い、両病院が連携を密にしたことがうかがえる。

静岡（駿府）病院による一元化施策は、漢方医のあり方にも及んだ。二年一月一日漢方医の奥医師半井卜仙は息子の静岡病院での西洋医学修業を願ひ出た。同年一月一七日奥医師石坂宗哲・茂木得鍼は静岡病院の無級医師に任命された。二人は後に医師ではなく無級看病頭という肩書になっている。一月二日には奥医師をつとめていた西洋医・漢方医六名に対し、病院での職務があることを理由にこれまで盆暮に支給されてきた手当金を廃止する旨が伝えられた。⁽²⁵⁾ 三年閏一〇月には東京で漢方医学を修業している藩士に対しては浅田宗伯が学力審査を行うこととするが、若年の者は今後西洋医学を学ぼう申し聞かせよとの藩庁布達が出された。⁽²⁶⁾ いずれも、奥の仕事よりも病院の業務を優先させるとともに、漢方医を病院に取り込むなど、西洋医主導による藩内医師編成を目指したものと見えよう。こうして「静岡御役人附」に掲載された静岡・沼津病院の頭・頭取から三等医師並まで、「医師」の肩書が付く者に漢方医は一人もいないという結果がもたらされた。

浅田宗伯は幕府医学館出身の井関温甫・木下守約らとともに明治二年遠州牧之原へ転住、開墾方の藩士たちの治療に従事するなど、⁽²⁷⁾ 藩中央から離れた位置で漢方医の勢力を温存しようと画策した形跡があるが、西

洋医の絶対的優位には及ぶべくもなかった。静岡や沼津の病院で生徒として医学を学ぶことを志願した地元医師たちの中には、「漢方医は一向はらやなかった⁽²⁸⁾」という風潮の中、「在来の漢法医術に見切りをつけなければならぬと悟⁽²⁹⁾」り、「旧来の漢方医を捨て、断然洋方医たらん⁽³⁰⁾」とする転向者が多かったと思われる。

三 掛川小病院の新設

一元化されたとはいえ、藩内の医療体制の上で静岡と沼津とが二大拠点である点に変わりはない。しかし、東西に長く延びた静岡藩領に散在する藩士たち、さらに各地域の領民に対しても医療要求に応える必要があった。静岡・沼津以外でも病院設置の需要は高かったのである。

明治三年（一八七〇）三月、田中・小島・浜松・中泉・横須賀・新居の各所に一名ずつ医師が置かれ、それぞれの勤番組之頭の附属とされ、手当金五〇両もしくは一〇〇両が給されることとなったとされるが、⁽³¹⁾ 実際にはもっと早い時期に各勤番組には医師が配属されていたようだ。たとえば、小島勤番組の場合、小島村在住の医師であり、病院生徒になっていた天野篁斎が二年一月一五日無級医師に任命され、同勤番組之頭附属とされている。無医地帯の勤番組が医師の派遣を求めることは他にもあり、たとえば富士郡吉原宿在の医師石井淡は病院生徒から無級医師に採用され遠州相良に送り出された。⁽³²⁾

しかし、そのやり方では不十分であり、特に西の遠江国には独立した病院を新設する必要があった。その設置場所の調査や設立準備の責任者となったのが林洞海であった。「遠州中泉辺」での小病院取り建てを担当すべく、三年二月二一日静岡において同地への出張を命じられた洞海は、翌日坪井信良らとともに出発、途中、在地の医師たちの氏名・年齢・学統などを記録しながら、二五日中午に着いた。中泉在勤の無級御雇医師として名がある小川清斎は、もともと駿府の町医者であるが、二

年一〇月段階で中泉の東新町に種痘所を開いていた。⁽³³⁾ 中泉最寄の少参事岩田緑堂、同権少参事刈込徳蔵（游萍）、同郡方山村惣三郎らにも面会し、元旗本の陣屋など、病院の建物としてふさわしいものを調査した。山村は洞海の義弟であり、また佐倉順天堂の創設者佐藤泰然の息子でもあり、病院建設に関する相談相手としては何かと都合がよかったに違いない。二九日には病院設立を前提に管内の医師に対し明細短冊の提出を求めることとした。洞海のこの指示を受け、中泉郡政役所では三月四日付で管下の村々に医師調査の廻状を発している。⁽³⁴⁾

三〇日には浜松着、近隣の「土医」たちに面会している。三月二日掛川に至り、勤番組之頭山田虎次郎、掛川最寄郡政役所の権少参事多田銃三郎に面会したほか、掛川近郷の素封家岡田佐平治・本間榮五郎には病院の永続方法について見込書の作成を依頼している。岡田は二宮尊徳の教えを受け、遠州の報徳社運動を推進した人物である。地域の豪農層の力を借り病院の維持・経営を図ろうとしたのである。

その後洞海は一旦沼津へ帰るが、三月一七日、遠州の病院の設置場所は中泉ではなく掛川に決定したとの通知が静岡から届く。翌日沼津を発ち、二一日掛川着、掛川勤番組之頭山田虎次郎・同頭並内藤七太郎と面談し、病院建設の詳細について検討した。三〇日静岡へ戻り、翌四月一日藩政補翼大久保一翁に会い、掛川の状態を話すが、大久保からは、遠州の病院はすべて藩の支出によって建設・経営するつもりであり、岡田佐平治ら地元豪農層の関与は認めないとの方針が伝えられた。洞海は「悪地」である掛川よりも他に「善地」があると考えていたので、その方針には納得せず、異論を上申したようだが、上からは藩知事徳川家達の遠州巡見を待つて決定するとの返事が下された。

ところが、その後、洞海には明治新政府からの出仕命令が下り、四月二七日沼津出立、五月三日付で大学中博士に任命され、六月には大阪医学校長に赴任する。遠州の病院設立計画からは全く離れてしまったので

ある。

洞海がいなくなっても掛川への病院設立は進み、三年八月掛川小病院が開業した。開業時には薬品価格などを明示した木版の布告文が出され、遠州全域の医師たちを対象とした「医道御取締」も宣言された。⁽³⁵⁾ 本来であれば洞海が就任するはずだったその頭取には、沼津病院二等医師三浦煥（文卿）が任じられた。三浦の門人でもあった三等医師並田村英裔も掛川に転任したらしい。⁽³⁶⁾

掛川に医師を割かざるをえなかった沼津病院では、坪井信良が「沼津欠員以誰償、杉田苦情非無謂」⁽³⁷⁾と漢詩に詠んだごとく、人手不足が深刻であった。「同寮多応東京召」と坪井が漢詩に詠み、杉田玄端が「甚人少二相成只煩雜ヲ極メ」「夜中モオチオチ安眠出来兼る」と知人宛の書簡の中で嘆いたように、新政府の出仕命令に応じた離任者の続出も原因であった。⁽³⁸⁾ 沼津病院からは三等医師篠原直路（二年九月）、桂川甫策（三年一月）、林洞海（三年五月）といった具合に新政府出仕者が相次いだほか、静岡病院へ転任した製煉方石橋俊勝（八郎、三年十一月時点で静岡勤務）、三河国豊橋に転任した三等医師並田村英裔（三年五月）らその他の理由での離任者もあり、その陣容は大きく崩れていた。そのため、三年以降には「御役人附」には載っていなかった杉村行三・渡辺東洋らが新たに三等医師並に採用、補強されたものと考えられる（杉村の採用は明治三年であることが墓誌から明らかである）。

掛川小病院自体も、医師を揃えるのが容易でなく、開業に先立ち「三人市在医」を雇ったという。⁽³⁹⁾ 頭取三浦に随伴・従学した伊豆国田方郡湯ヶ島村の村医井上潔（玄碩）も、「明治三年仕静岡藩始在掛川病院」⁽⁴⁰⁾と墓誌に彫られたように、師の掛川赴任に伴い採用されたものと思われる。

三年一〇月一三日、掛川の病院に関する御用は、郡政役所と勤番組の責任者である多田・山田・内藤が藩庁掛・少参事松平勘太郎同様に取り扱うようにとの達しが出されている。⁽⁴¹⁾ 掛川小病院は独立させるにはあま

りに弱体であり、また地理的にも遠く目が行き届かないという意味で、このような措置が取られたものと推測する。領内の病院・医師に関しては静岡病院が一手に掌握するという理想にはそもそも無理があったのかもしれない。

四 病院生徒の教育

洞海の「慶応戊辰駿行日記」からは、明治三年二月二七日条に記された遠州周智郡の三名の医師の名前に「静岡入門済」と添え書きされている以外、病院生徒の教育に関しては直接うかがい知ることができない。彼は席の暖まる暇もなく動き回り、やがて離藩したので、実際に教育に携わることはなかった。しかし日記の記述からは、相磯為（為之助、元年一月一日条）、中西謙三（一月四日条）、大川周道（一月五日条）、石井成斎（二年一月二五日条）など、接近してゐる地元医師が少なくなかったことがわかり、洞海への個人的入門や病院生徒となることを希望しているのか否かは別にして、何らかのつながりを持つとする者の存在が見て取れる。

沼津の陸軍医局（後沼津病院）では、静岡病院への一元化により当初の陸軍医学所構想が頓挫したが、むしろ静岡病院の方針に合わせる形で生徒教育が行われたものと推測される。静岡・沼津の病院での教育の実態に関しては、史料がないため詳細は不明であるが、そこで学んだ生徒の履歴については、一次史料・二次史料に以下のように記される。病院の生徒になったとも、病院医師の門人になったとも、どちらにも解釈できる記述のし方があるが、事実上双方に違いはなかったものと推測される。

白井直一「明治二年正月旧静岡藩駿河国沼津病院江入門、頭取杉田玄端ニ従事、英学並西洋法医術修業」⁽⁴²⁾

山崎塊一「沼津兵学校に入りて兵学の研究に従事せしか当時兵学校附

属として医学校の開設せられ杉田玄端氏之か師教たるに遇ふ一日君時世の変遷に感ずる所あり翻然其方向を転し即時医学校に移り杉田氏に就き医学の研究を事とせり」⁽⁴³⁾

槇正寛「明治之初入沼津医院専心攻其術」⁽⁴⁴⁾

栗田懿吉「旧静岡藩沼津病院に入り杉田玄瑞氏等の諸家に従ひ医学を研究し」⁽⁴⁵⁾

多々良梅庵「駿府病院に学ぶこと、なつた。（中略）間もなく沼津に

至り沼津病院頭取杉田玄端師に従ひ、（中略）英書を研究した」⁽⁴⁶⁾

清野勇「十六歳（明治二年）静岡に出て海軍々医総監戸塚文海先生の塾に寓して藩の蘭学校部に入り学ぶ」⁽⁴⁷⁾

瀬戸宇三郎「明治三巳年四月、沼津病院医三浦煥へ隨身西洋医学修行、

同年八月三浦煥義遠州掛河病院頭取拜命ニ付彼地移転一ヶ年修行」⁽⁴⁸⁾

石井成斎「医局修行生也、曾て杉田成卿塾ニ居候」⁽⁴⁹⁾

酒井恭順「明治四年一月沼津病院江入門」⁽⁵⁰⁾

野田洪哉「年十四歳にして静岡の名医戸塚文海氏の塾に入り医道を研鑽し傍ら旧藩校に通学し洋学を修むる」⁽⁵¹⁾

富沢研道「明治三庚午年五月ヨリ同駅八幡町洋医杉田玄端江隨身明治三庚午年五月より明治五壬申年一月迄壹年五ヶ月之間洋法指鍼術修行」⁽⁵²⁾

虎見洪平「伯父病院頭戸塚文海方へ門入候業仕り罷り在り候ところ、

なお一と際勉強仕りたき志願に付、当分の内同人方へ入塾」⁽⁵³⁾

青木省三「幼にして医道に志し旧沼津藩医柳下昌達氏に従ひ後杉田

玄端氏に学ぶ明治六年より大岡村に於て開業し」⁽⁵⁴⁾

彼らのほとんどが地元町の医・村医である。白井・山崎・虎見だけは藩士であった。白井家については不明だが、山崎・虎見の家は明らかに医家ではない。駿河府中藩では、二年一月二三日付で「向後術業格別御撰之上、家筋二不拘御医師可被命」⁽⁵⁵⁾云々との布達を發しており、医師

それとは別に、明治三年（一八七〇）には、すでに資業生に及第していた沼津兵学校生徒からも医学修業者が選抜されることになった。第二期資業生の三田信・望月二郎・片山直人・滝野盤・加藤寿、第四期の塚原靖・志村貞鍬・根岸定静・諏訪頼永・山内定一、第五期の永井久太郎、第六期の松岡馨・田口卯吉の一三名である。⁽³⁸⁾彼らについては、西洋の軍医は他の将校と同等であり、日本の「御太鼓医師」とは違うのだなどと、兵学校頭取自らが説得にあたり、転科を納得させたという。⁽³⁹⁾身体的に兵科の軍人に適さないという理由もあったかもしれない、また自ら志願した積極的な志望者も含まれたと考えられる。ちなみに医者の子であることが判明しているのは永井のみである。

であり、兵学校教授乙骨太郎乙が静岡学園所に転任するのに合わせ、医学生を連れて行くことになったためである。その際、以下のような辞令が出された。兵学校資業生としての月手当四両に加え、一両が支給されることになった。

志村太郎

覺

一月二日には沼津を発ち静岡へ向かい、同月一五日からは授業が開始された。住居は静岡病院の寄宿寮であった。なお、田口卯吉は発令も少し遅く、静岡到着は二月二四日だった。⁽⁶¹⁾ 志村貞鏡（太郎）の父親が日記に記したところによれば、病院での学科（担当教員）は、解剖学（名倉）、窮理学（柏原学而）、化学（石橋俊勝）、人身窮理（林紀）、治療書（同前）、西医略論輪講（同前）などであった。⁽⁶²⁾ 坪井信良が記した「塾則」によれば、生徒には寄宿生・幼童生、教師には助教・舎長といった区別があつたらしい。兵学校資養生出身生徒が手当金四両を毎月支給されたのに対し、その他の一般生徒の場合はどうだったのか。逆に月謝を払ったのか否かなど、わかっていない。なお、学習の実態を示す一次史料としては、田口卯吉が「南寮」入居時代に記したノート数冊が残る。⁽⁶³⁾

ところが、翌年彼らの身分には大きな変化があつた。志村貞廉日記の四年五月一九日条に「此度塚本桓甫出岡二而医学修業之資養生之分静岡病院へ引渡二相成候由也」と記録されたのがそれである。つまり、先に掲げた辞令では、四年一二月に沼津において試業を実施するとあつたように、あくまで沼津兵学校資養生という身分での派遣であつたのが、その後彼らを兵学校から切り離し完全に静岡病院の所属生徒とすることになったのである。兵学校頭取塚本明毅（桓甫）が静岡に赴き、病院との

間で調整を行ったのであろう。田口卯吉の履歴書にも、明治三年「十二月二十日静岡病院に於て医学修業被命」、「同月二十日静岡表移住仕」、さらに「同四年五月三日静岡病院生徒被命候」⁽⁶⁵⁾とあり、四年五月に所属の変更が行われたことがわかる。田口卯吉の姉で静岡に住んだ木村鍬子の四年六月五日付書簡に「此程沼津よりの資業人不残当所江参られ、しづおかの御人ニ相成候て、卯吉なども当所の御わり付ニ相成候」⁽⁶⁶⁾とあるのも、所属の変化に伴う割付地変更のことを意味しているのである。松岡馨の履歴書に「同四年五月三日 一兵学校附属病院生徒申付候事 但月手当金四円」⁽⁶⁷⁾と記されているのは、不正確な記憶にもとづくものであろう。この医学生的身分切り替えは、医師養成に関しては静岡病院が一括掌握するという大原則が改めて確認され、兵学校が維持していた医学資業生という存在を吸収・解消することになったからだと考えられる。静岡と沼津の間、すなわち病院と兵学校の間で何らかの話し合いが行われた結果であろう。

とはいえ、医学生の学習が実を結ぶまでもなく、廃藩置県による病院廃止はすぐにやって来た。明治四年（一八七二）八月五日時点で、誕生したばかりの静岡県には、旧藩から引き継いだ「三ヶ所病院医師其外生徒等共」一三二名が存在した⁽⁶⁸⁾。病院頭林紀は明治政府の陸軍軍医に出仕することとなり、病院生徒たちも「不残の願ニて」⁽⁶⁹⁾それに随行し東京で修業することを願い出、九月一六日付で「東京在勤」（松岡馨履歴書）を命じられたようである。彼らは一月上旬に上京するはずであったが、少し延期され一二月五日になったようである⁽⁷⁰⁾。果たして東京の陸軍病院生徒に横滑りしたのが何名だったのか不明であるが、沼津兵学校から静岡病院生徒に転じた一三名のうち五名、その他三名、計八名のみが明治五年（一八七二）時点の東京での医学修業人として記録されている⁽⁷¹⁾。

一方、静岡病院生徒からは他藩への留学生も送り出されている。四年

二月八日志村貞鏡は塚原靖・小川元次郎とともに鹿児島藩での医学修業を命じられ、三月から一二月沼津に戻るまで同地に留学、高木兼寛（藤四郎）に師事した。なお、この三人の所属は、帰藩するまでは静岡病院ではなく沼津兵学校のままとされた⁽⁷²⁾。廃藩前後の混乱の中、やはり彼らも学業を全うすることはできなかった。

なお、東京に松本順が開いた私塾には、明治二年秋から四年五月にかけ一〇名ほどの静岡藩士が入門しているが、あくまで個人としての行動であり、彼らが静岡病院生徒として派遣された可能性は少ないと考える。

おわりに

最後に、静岡藩の病院が行った、あるいは行おうとした医療と医学教育について、その特徴を四点ほど指摘し、まとめておきたい。

まず第一は、静岡病院（駿府病院）による医療・医学教育の一元化である。一元化の意味には、①医師の個人的診療・教育活動よりも病院でのそれを優先する、②陸軍局が独自に設置した陸軍医局・陸軍医学所の吸収、③沼津兵学校の医学資業生の静岡病院生徒化、④支院としての沼津病院・掛川小病院の位置付け、⑤西洋医による漢方医の統制、⑥領内医師の掌握、などがある。

①は、坪井信良が書簡の中で「一同申合、自家之調合所ハ廃止、日夜院之御用専ラニ取扱」と記したように⁽⁷⁴⁾、個人的に自宅で医療活動を行ったりすることは自粛し、病院での診療活動に専念することが医師たちの間で合意された。ただし、門人の受け入れについては完全になくなったわけではなく、杉田玄端のようにその後も多くの門人を抱えた者もいた⁽⁷⁵⁾。病院生徒と私的門人との区別が明確になされていたのか否かは判然としない。

②と③は関連するものであり、明治二年五月に合意された沼津兵学校での軍医養成廃止であるが、資業生の病院生徒への身分切り替えとして

完全に実現されたのは四年五月までずれ込んだ。

④は、沼津・静岡の並立体制を止め、静岡を中核とし領内にバランスよく支院を配置するという方針であったが、医師の配置転換により結果として沼津病院の弱体化をもたらした。また、第三の病院が中泉・浜松ではなく遠江東部に位置する掛川に決まったことで、病院の配置は領内全体では東に偏することとなった。いずれも理想的なバランスが取れなかったことになる。

⑤は、奥医師などの漢方医を病院の傘下に置くこととするものであった。明治元年の役人名簿に掲載されていた奥医師とその多くを占めた漢方医が三年段階の名簿「静岡御役人附」では消えた。江戸の医学館のごとき漢方医専門の教育機関が設置されることもなかった。しかし、東京での漢方医修業生に対する浅田宗伯の監督権を認めたように、決して漢方医の存在そのものが排除されたわけではなかった。藩知事の「御匙」は林紀・半井卜仙の洋漢医がともに勤めている⁽¹⁶⁾。

⑥は、学歴を記した明細短冊を提出させるなどして地元の町医・村医を監督し、彼らを藩医として採用したり、病院で再教育したりすることを意図したといえ、静岡・沼津のみならず小規模で存続期間も短かった掛川小病院でも地元医師の教育を行った事実が知られるが、果たして完全掌握や徹底した組織化がどこまで実現し、その内どれだけの医師を生徒に呼び込んだのかは疑問である。試験・免許・登録などの制度が実施された形跡もない。沼津藩の荻生洪斎（洪道）、小島藩の遠藤周民・高橋玄策⁽¹⁸⁾ら、房総へ転出した旧藩に仕えていた医師を静岡藩が新たに取込み、領主側からする既存の地域医療を部分的に継承した一面もあると思われるが、徳川家の一円支配にもとづく病院体制の一元化が、それまで駿河・遠江に形成されていた、あるいはされていなかった町村医の地域秩序や集団的存立基盤に対しどれだけの刷新や変容を迫ることになったのかは解明できていない。いずれにせよ、にわかに成立した静岡藩の

場合、近世からの継続性の上に維新後の医制革新を進めた山口・鹿児島など他の大藩の領内掌握に及ぶべくもなかった。

次に第二として、病院の設置・経営における地元庶民の関与についてである。静岡病院も沼津陸軍医学所も、当初から医療を藩士のみならず庶民に対しても広く施すことを宣言していた。そして実際にそれは実行された。また、村医・町医を病院生徒として受け入れ教育を行い、場合によってはその中から病院医師や勤番組派遣医師を採用した。静岡学問所が農商の入学を許し、優秀な者については藩の役人へ登用することをうたったのと同じく、医療・医学教育の両分野においても庶民への開放はなされたといえる。

しかし、掛川小病院設置計画に際し大久保一翁が示したように、病院はあくまで「お上」（藩）が費用を負担するものであり、豪農商ら地元庶民の有力者による経営参加は否定されていた。そもそも大久保ら藩幹部と林紀ら病院幹部とが一枚岩だったのかどうか不明であり、この矛盾はそこから出てきた可能性がある。二年五月一四日に竣工した静岡病院寄宿舍には、駿府の商人・大工棟梁らが寄付した五七九両があてられた⁽¹⁹⁾。沼津病院では、二年八月段階において「寄附姓名帳」を村々に廻し、庶民からも病院の建設資金を募っている⁽²⁰⁾。庶民には金は一切出させない方針だったのか、金は出させても口は出させない方針だったのか、判然としないが、もしも庶民の藩政への関与を嫌ったものだとすると、封建領主としての限界が見て取れる部分である。

第三点としては、病院という近代的な医療機関の存在がいかに認知され、活用されたかである。力を入れた種痘が藩士とその家族や領民に少しでもだけの普及度を達成したのかはわからない。また、病院の利用率に関する士庶の比較などもできない。しかし、領外の伊豆国民衆までもが三浦煥の沼津から掛川への転任を引き止めるべく嘆願書を提出したように⁽²¹⁾、庶民に対しても大きな恩恵を与え、かなりの定着を示したものと

表1 平野勝禮日記にみる沼津病院医師の診療

年月日	記 載
明治2年 5月6日	三浦弟子来
5月8日	三浦文卿来
5月11日	文卿来
5月18日	三浦来
5月23日	田村と申三浦へ同居之医師来
6月22日	三浦弟子木村来
明治3年 2月9日	三浦文卿来
2月22日	三浦文卿入来
2月28日	三浦文卿見舞
3月2日	三浦文卿見舞
3月5日	三浦文卿見舞
3月10日	三浦文卿見舞
3月18日	昨夜より鈔吹出もの致ニ付井上玄碩見舞
3月20日	三浦文卿見舞
3月26日	三浦文卿見舞
4月12日	三浦文卿見舞
5月3日	井上玄碩来
5月4日	三浦文卿入来
5月8日	井上玄碩来
5月10日	井上玄碩見舞
5月12日	三浦文卿見舞
5月13日	井上玄碩見舞
5月20日	中西謙三来
5月25日	三浦文卿井上玄碩来
5月28日	井上玄碩来
6月1日	井上玄碩来
6月6日	井上玄碩来
6月9日	井上玄碩見舞
6月10日	三浦文卿見舞
6月12日	井上見舞
6月14日	井上玄碩見舞
6月15日	三浦文卿森岡元龍見廻
6月16日	杉田玄端始而見舞
6月17日	夫より医局へ行、中西謙蔵来
6月20日	杉田見舞
6月22日	昼前病院へ行
6月23日	八字頃より病院へ行、夫より不動尊参詣、杉田玄端見舞
6月24日	七字頃より病院へ行、夫より不動尊参詣
6月25日	八字前より病院へ行、夫より不動尊参詣、杉田玄端見廻夜四ツ半
7月28日	朝病院江行
11月9日	鈔医師へ行
明治4年 1月11日	佐野寛道見舞
2月2日	佐野見舞
2月9日	佐野寛道見舞

「日記」(平野綏氏所蔵・平野家文書E-9、E-10)より作成

推察される。藩士の間ではなおさらであつたろう。

表1は、平野勝禮(雄三郎、沼津勤番組之頭支配世話役)という沼津移住静岡藩士の日記から拾い上げた、病院と医師に関する記事の一覧である。平野は何か病氣を抱えていたのであろうが、かなり頻繁に診察を受けている。彼にとって沼津病院医師三浦煥がかかりつけ医ともいべき存在であり、その門弟田村英斎・井上潔(玄碩)・木村某らも師の代役を果たしたようだ。患者が病院に行くことよりも医師の往診のほうが圧倒的に多いのも特徴である。

以下に掲げるのは藩士の隠居願である。医師の診断が前提とされていたことがわかる。静岡・沼津などでは当然病院の医師たちがその役割を担当したのであろう。

跡式奉願候覚

元高三拾俵式人扶持

持扶持五人扶持

沼津勤番組之頭支配

三等勤番組

明治四未年七月

私儀久々持病之疝積ニ而難決仕候ニ付沼津病院御医師杉田玄端松島玄雄療養相請候処病氣次第第二差重此上迎も全快仕御奉公可相勤躰無御座候旨右御医師兩人被申聞候就而者若養生不相叶相果候ハ、書面実子才太郎江跡式無相違被下置候様仕度此段奉願候以上

田中鈞吉

高 晴江殿
天 民七郎殿⁽⁸⁾

病氣のため欠勤や退役、隠居を願ひ出る際など、書類上医師の診断が必要とされたようであり、病院と医師の存在は公的な場面でも極めて身近なものとなっていた。

田中鈞吉

未歳二十九

実子 田中才太郎

未歳二

第四点目として指摘すべきは、病院での医学学習の有効性である。地元医師の中からは、その後も地域の医療を担い続けた者が多かった一方、石井淡のように上京し宮内省医員となった者も出た。石井は先祖代々の村医から西洋医へと変身し、活躍の場を地域から地域の外へと広げたわけである。彼にとつて静岡藩時代の経験は有効であったといえよう。病院生徒や病院医師の子弟からは、清野勇・宇野朗・佐野誉のように大学東校（東京大学医学部）に進学、医学界の最高峰で足跡を残すことになった秀才も輩出した。

一方、もともとの医家出身ではなかった沼津兵学校資養生・静岡病院生徒の場合、一三名中、最終的に医師として身を立てたのは三名のみであり（滝野盤・加藤寿・諏訪頼永、いずれも軍医、ただし諏訪は獣医）、多くの者にとつて静岡藩での医学修業は無駄となった。これは変革期・混乱期に勉強した者として責められるべきことではないし、決して静岡藩の医学教育の有効性を否定するものとはいえない。他に、薬業分野に進出した山崎塊一のような存在も評価できる。

静岡藩が能力本位の人材育成システムを先駆的に準備したという意味で、静岡学問所も静岡病院も同じであったが、一般行政分野の藩官僚を目指すよりも医師へのコースのほうが敷居は低かった。そもそも医師は士庶両身分にまたがる存在であったからである。だからといって医家以外の庶民出身者が藩の病院生徒になった事例はほとんど知られていない。逆に沼津兵学校からの病院生徒採用は、医家以外の武士出身者の医学界への進出を切り開いたといえる。能力主義的な人材配置という点では、旧来医家であった藩士を医業から脱せしめるという逆転現象も生じさせた。⁽⁸⁴⁾

静岡藩の病院では、他藩や新政府のように西洋人医師を雇い入れたり、欧米へ留学生を送るといった、時間的・財政的余裕はなかった。⁽⁸⁵⁾ 建築や設備・備品も、幕府から引き継いだ蔵書以外は決して恵まれたもの

ではなかった。また、沼津兵学校や静岡学問所が教科書を刊行したのとは違い、教育用の書籍を独自に発刊することはなかった。しかし、数値化はできないものの、身分制を超えて後の医療界への人材供給といった結果面を見ると、時間と空間を限られた静岡藩の医学教育であったが、それなりの存在意義はあったのである。

むしろ、陸軍局（沼津）の独自性をなくし、藩内の医療行政の一元化を目指した林紀や戸塚文海が、廃藩後明治政府に出仕してからは軍医となったのは何とも皮肉である。巨大な政府組織の中では個々の役割は細分化されており、彼らに割り当てられたのはその一部門のみであった。彼らの静岡藩での経験がなにがしかの意味を持ったか否かはわからない。

以上述べた四点にわたる特徴から、静岡藩が病院を通じて推進した医療と医学教育は、近代的医療政策としての先駆的意味を有しながらも様々な限界を含み込んでいたといえる。一地方政権としては全国的影響力を持ちにくかったこと、廃藩までの短期間では成果を上げられなかったという、基本的な制約も前提条件になっており、正負ともに幕府の後身である藩自体の生い立ちに由来するものであった。医に関わる全面的な革新は明治新政府に委ねねばならなかったのである。

林洞海「慶応戊辰駿行日記」には、それらを指し示す新事実が多く記録されていた。末筆ながら貴重な史料の利用・紹介をお許しいただいた順天堂大学医史学教室および酒井シズ先生に対し記して感謝申し上げる次第である。

註

- (1) 拙著『沼津兵学校の研究』(二〇〇七年、吉川弘文館)、三七九～三八六頁。
- (2) 『静岡県史 資料編16近現代一』(一九八九年、静岡県)、一九八頁。
- (3) 勝部真長他編『勝海舟全集 17 陸軍歴史Ⅲ』(一九七七年、勁草書房)、五三五～五三六頁、『勝海舟全集 13 海軍歴史Ⅱ』(一九七四年)、四六一頁、四六九頁。
- (4) 倉沢剛『幕末教育史の研究 一』(一九八三年、吉川弘文館)、三八〇～三八六頁。
- (5) 池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙齋 池田文書の研究(下)』(二〇〇七年、思文閣出版)、六七六頁。なお、『駿河表召連候家来姓名』掲載の高島春庭が馬島春庭の誤りだとすれば、彼も新政府の東京府大病院に出仕したため移住しなかったことになる(前掲『幕末教育史の研究 一』三九〇頁)。
- (6) 勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集 別巻 来簡と資料』(一九九四年、講談社)、三〇二～三〇三頁。
- (7) 前掲『幕末教育史の研究 一』、三八五～三八七頁。
- (8) 『静岡藩御達留 一』(東京大学史料編纂所蔵)。なお、二年正月発行「御役名鑑」では、「川島宗瑞」は奥医師並御雇として掲載されている。
- (9) 前掲『静岡県史 資料編16近現代一』、一九八頁。
- (10) 『静岡県史 資料編16近現代一』、一一八〇～一一八五頁。
- (11) 宮地正人編『幕末維新風雲通信』(一九七八年、東京大学出版会)、二七七、二八八頁、前掲『幕末教育史の研究 一』、三七三～三七七頁。
- (12) 富士市立博物館蔵・旧中里村大坪関家文書。
- (13) 渡辺竹雄「ある医家の系譜―瀬戸玄博の人柄と世相を中心にして―」(『御殿場市史研究』V、一九七九年、御殿場市史編さん委員会)、二九頁。
- (14) 拙稿「史料紹介 山本鈴木家文書中の静岡藩御用留―沼津兵学校関係史料を中心に―」(『菰山町史の葉』第一四集、一九九〇年、菰山町)、九頁、一一頁。開業前の二月一三日付廻状でも医局薬園掛として筆算のできる者の募集が行われている(『山中庄治日記』、一九七四年、沼津市立駿河図書館、一六頁)。
- (15) 『静岡県史 資料編16近現代一』、一九九頁。
- (16) 大久保利謙編『西周全集』第二卷(一九六二年、宗高書房)、四七二頁、四七四頁。
- (17) 静岡県教育研究所編『静岡県教育史 通史篇上』(一九七二年、静岡県教育史刊行会)、一一六頁。
- (18) 土屋重朗「沼津病院、駿東病院についての新知見」(『沼津史談』第一五号、一九七四年)。
- (19) 前掲『幕末維新風雲通信』、三三三～三三八頁。
- (20) 沼津市誌編纂委員会編『沼津市誌』中巻(一九六一年、沼津市)、七六二頁。
- (21) なお、沼津病院には「御役人附」に掲載されていないが、御薬園掛三名、調剤掛数名もいたとされ、調剤掛は医学生が担当したという(石橋純彦「沼津兵学校沿革(六)」、『同方会誌』四三、一九一六年、復刻合本第七巻、一九七八年、立体社)。他に、製煉掛という担当も置かれていたことがわかっている(拙稿「沼津兵学校関係人物履歴集成 その二」『沼津市博物館紀要』第二十七号、二〇〇三年、沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館、一四四頁・渡辺安五郎)。この製煉掛も御薬園掛も、氏名が判明しているのは、ともに「沼津御役人附」では病院附御使之者出役として掲載された二八名に含まれ、同役は医師を補助し様々な業務に携わった人々であると思われる。前掲「沼津兵学校沿革(六)」で厚木某とされた御薬園掛は、病院附御使之者出役をつとめ、廃藩後は富士郡・駿東郡で小学校教師となり、東京で私塾梯道舎を開いた厚木勝久(壮平、明治二十四年没)のことであろう。勝久の息子厚木訥平次(一八六〇～一九四二)は、沼津病院時代の父の仕事に触発されたものか、後に陸軍獣医大佐に進み、飼料・有毒植物などを専門とする獣医学博士となった。以上、厚木勝久・訥平次父子については、『東京教育史料大系』第三巻(一九七三年)、『日本獣医畜産大学小史』(一九八一年)、『新聞に見る人物大事典』第一巻(一九九四年、大空社)、厚木敏徳氏所蔵過去帳、沼津市・本光寺過去帳などによる。
- (22) 『静岡県史 資料編16近現代一』、一一八九頁。
- (23) 前掲『幕末維新風雲通信』、三三三頁。
- (24) 池田哲郎「沼津文庫の蘭書について」(『蘭学研究会研究報告』第一八号、一九五七年)。
- (25) 『静岡県史 資料編16近現代一』、一一九〇～一一九二頁。
- (26) 『久能山叢書 第五編』(一九八一年、久能山東照宮社務所)、四三六頁。
- (27) 『東京教育史料大系』第四巻(一九七二年、東京都立教育研究所)、二二七～二三三頁。
- (28) 『随筆・遺稿』(一九五六年、清野謙次先生記念論文集刊行会)、五六〇頁。清野謙次は町医から沼津病院医師になった清野一学の子孫、同病院生徒清野勇の子。
- (29) 『佐野誉 回想録』(一九三七年、私家版)、三八頁。佐野誉は町医から沼津病院医師になった佐野寛道の子。
- (30) 多々良玄編『多々良梅庵小伝』(一九三〇年、私家版)、六頁。多々良梅庵は静岡と沼津の両病院に学んだ駿河国の村医。
- (31) 静岡県史料刊行会編『明治初期静岡県史料』第四巻(一九七〇年、静岡県立中央図書館)、一四六頁。
- (32) 『静岡県史 資料編16近現代一』、一一九〇～一一九二頁、一一九四頁。
- (33) 『静岡県史 資料編16近現代一』、一一八九～一一九〇頁。

- (34) 『磐田市史 史料編3 近現代』(一九九四年、磐田市)、五二七～五二八頁。
- (35) 『静岡県史 資料編16 近現代』、一九五～一九六頁。
- (36) 拙稿「史料紹介 沼津兵学校人名簿」(『沼津市博物館紀要』21、一九九七年)、五四頁。
- (37) 前掲『幕末維新風雲通信』、三五四頁。
- (38) 前掲『沼津病院、駿東病院についての新知見』、四三頁。
- (39) 前掲『幕末維新風雲通信』、三五七頁。
- (40) 藤沢全『若き日の井上靖研究』(一九九三年、三省堂)、五〇頁。
- (41) 前掲『久能山叢書 第五編』、四〇七頁。
- (42) 『沼津市医師会史』(一九六四年、沼津市医師会)、一三三頁。
- (43) 久保田高吉編『東洋実業家評伝』第式編(一九九三年、博文館)、八八頁。
- (44) 拙稿「沼津掃苔録」(『沼津市博物館紀要』21、一九九七年)、一四頁。
- (45) 高室梅雪『静岡県現住者人物一覽』(一九九九年、三成社活版部)、九八～九九頁。
- (46) 前掲『多々良梅庵小伝』、六頁。
- (47) 古屋照治郎『近畿医家列伝 前編』(一九〇二年、大阪史伝会)。
- (48) 前掲「ある医家の系譜―瀬戸玄博の人柄と世相を中心にして―」、三一頁。
- (49) 『幕臣志村貞廉日記 二』(東京大学史料編纂所蔵) 二年七月八日条。
- (50) 『沼津市史 史料編近代1』(一九九七年、沼津市)、二四三頁。
- (51) 高室梅雪『静岡県現住者人物一覽』。
- (52) 『履歷明細書』(獅子浜植松家文書C-51、沼津市明治史料館所蔵)。
- (53) 『八王子千人同心史 通史編』(一九九二年、八王子市教育委員会)、七七三頁。
- (54) 高室梅雪『静岡県現住者人物一覽』。
- (55) 『静岡県史 資料編16 近現代』、一一七九頁。
- (56) 国史大系編修会編『続徳川実記』第五篇(一九六七年、吉川弘文館)、二九五～二九六頁。
- (57) 前掲「沼津兵学校沿革(六)」。
- (58) 石橋純彦「沼津兵学校沿革(五)」(『同方会誌』四二、一九一六年、復刻合本第七卷、一九七八年、立休社)。なお、他の史料には、「静岡病院寄宿」九名の一人として第四期資養生中川功(惣一)の名前も記されている(拙稿「史料紹介 沼津兵学校人名簿」『沼津市博物館紀要』21、一九九七年、五九頁)ほか、後述の鹿兒島藩派遣医学生手当金支給辞令には、「兵学校資養生塚原直太郎・志村太郎・小川□(元)次郎」とあることから(拙稿「下張から発見された沼津兵学校関係文書」『沼津市博物館紀要』25、二〇〇一年、一五～一六頁)、小川元次郎なる人物も静岡病院に派遣された資養生だったことになる。四年三月二六日付木村鏡子書簡には「沼津よりの人病院へ十五六人程参り」と記されており(『木村熊二・鏡子往復書簡』、四二頁)、一三名よりも少し多かった可能性がある。
- (59) 前掲「沼津兵学校沿革(六)」。
- (60) 前掲「幕臣志村貞廉日記 三」(東京大学史料編纂所蔵)。
- (61) 『木村熊二・鏡子往復書簡』(一九九三年、東京女子大学比較文化研究所)、二九頁。
- (62) 以上、志村貞鏡の動向については、『幕臣志村貞廉日記』のほか、宮地正人「幕末維新期の社会的政治史研究」(一九九九年、岩波書店)、四二二～四二三頁も参照。
- (63) 菅野美和氏所蔵。
- (64) 『幕臣志村貞廉日記 四』(東京大学史料編纂所蔵)。
- (65) 鼎軒田口卯吉全集刊行会編『鼎軒田口卯吉全集』第四卷(一九二八年、吉川弘文館)、口絵写真。
- (66) 前掲『木村熊二・鏡子往復書簡』、五二頁。
- (67) 拙稿「沼津兵学校関係人物履歴集成その三」『沼津市博物館紀要』30(二〇〇六年)、四三頁。
- (68) 『静岡県史 資料編16 近現代』、一四一頁。
- (69) 前掲『木村熊二・鏡子往復書簡』、六一頁。
- (70) 四年一月木村熊二宛田口卯吉書簡、『鼎軒田口卯吉全集』第八卷(一九二九年、吉川弘文館)、五八八頁、田口親「田口卯吉」(二〇〇〇年、吉川弘文館)、四四頁。
- (71) 前掲『明治初期静岡県史料』第四卷、一三三～一三四頁、諏訪頼永・滝野盤・加藤寿・三田信・田口卯吉が沼津出身、半井良策・坂循・安香真平がその他。安香は榎本武揚の甥で、後に陸軍薬剤官・熊本薬学専門学校長になった安香堯行のことであろう。坂循は陸軍薬剤官になった坂修の誤りであろう。
- (72) 前掲『幕末維新期の社会的政治史研究』、四二四～四二五頁。
- (73) 鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』(一九三三年、東京医事新誌局、一九九四年復刻、大空社)。宮重清・瀧済民・清水英二郎・石川藤四郎・三橋新次郎・桑原国太郎・松本正三・馬場百助・山村鑑太郎・古川銀太郎。
- (74) 明治二年五月一〇日付書簡、前掲『幕末維新風雲通信』所収、三三二頁。
- (75) 杉田には自分の息子のほか、小諸藩出身の神戸文哉、弘前藩出身の小山内建(玄洋)ら東京から付き従った書生が同居・従学していた(拙稿「杉田盛の六十年回想記」『静岡県近代史研究』第三二号、二〇〇六年、静岡県近代史研究会)。小山内は明治三年正月に大学東校少句読師、神戸は閏一月に大学少得業生を拝命し新政府に出仕している(東京大学図書館所蔵・東京帝国大学五十年史料「職務進退」)。
- (76) 『静岡県史 資料編16 近現代』、一一九一頁。
- (77) 明治四年五月から掛川小病院に学んだ遠江国小松村の村尾春洋の例(『土屋重

朗『静岡県の医史と医家伝』、一九七三年、戸田書店、一四八頁。

(78) 遠藤周民については佐野小一郎『静岡県家歴鑑 沓』(一九九四年、六二二)、高室梅雪『静岡県現住者人物一覽』(一九八八年、一九九頁)、高橋玄策については前掲『静岡県の医史と医家伝』(七七、三五七頁)。

(79) 『静岡市史 総目次・年表・索引』(一九八二年、静岡市役所)、五九二頁、『静岡県史 通史編5 近現代二』(一九九六年、静岡県)、六六〇六七頁。

(80) 拙稿「地域史上の沼津兵学校―その地元への関与と遺産―」『沼津市博物館紀要』10 (一九八六年)、五〇頁。

(81) 前掲『沼津市史 史料編近代1』、六六〇六八頁。

(82) 静岡県士多喜控「従明治二年 公私雜記」(沼津市明治史料館保管・大野寛一関係文書)。

(83) 沼津兵学校附属小学校の教科書として発行された『諸届并文章』(田中明氏所蔵)には、公私にわたる文章の作成例が掲げられているが、その中には公的な文案として医師の診断を仰いだ上での病氣引籠届・退役願・隠居願がある。

(84) 静岡学問所の漢学や英学担当教授になった宮崎立元・曾谷言成・名倉納、同学問所の生徒になった坂湛らがその例である。宮崎の前歴は幕府医学館講師・世話役(『江戸』第四巻第一綴、一九一六年、江戸旧事采訪会)。曾谷家は姓から判断して幕府典医であると推測。また、立元の子宮崎駿児に対し「叔宮崎言成」と記した文献があることや、イギリス留学時の日記「英行日誌」(早稲田大学図書館所蔵・柳田泉文庫)の記載などから、曾谷言成は宮崎立元の実弟らしい。後に宮崎に復姓し、明治二〇年には函館商業学校教諭となったほか、大正五年(一九一六)には『江戸』第三巻第二綴に昌平黉に関する記録「茗羹紀事」を投稿している。名倉は静岡病院医師名倉弥五郎の子。坂は幕府典医坂春庵の三男で後に工学博士となった。

(85) 明治四年三月、静岡病院頭林紀の弟林糾四郎、同医師名倉弥五郎の子名倉納がアメリカ留学に出発しているが、目的は語学修業であった(前掲『明治初期静岡県史料』第四巻、一三〇―一三二頁)。また、五年(一八七二)一月三日付坪井信良の書簡に「医師モ不遠内字漏生より雇入之積り也」(『幕末維新風雲通信』、三五九頁)とあるほか、それに関連してか、静岡学問所教授吉見義次が四年(一八七一)九月に「藩立学校独逸医学世話心得並に取締」(『静岡県現住者人物一覽』、一八九九年、一五七頁)に任命されたといった事実が知られるが、いずれも既に廃藩後のことであった。

(表紙)

慶応戊辰駿行日記

存誠斎

信州松本山家藤井村

桐原真堂

(付箋)「金十五両 赤松〆宿へ□□□□預り 右糺四郎入用□□致□□

□□す」

同松本□橋

木屋平三郎

東京本所堅川通り四ツ目松代町式丁目

佐々木東水

見付宿入口足袋や松風隣

宮崎志津世

東京神田永富町三丁目 嘉兵衛地□かじや次郎□止宿

小川町錦小路元新庄左近羽喰屋□

宇都宮幸之進同居

赤松大三郎

本所北番場明玄寺隣元小笠原助三郎今は東久世殿屋敷地面内高橋三蔵の跡

外務少丞

田辺太一

下谷樋口□元家

宮原中

左衛門かしわた貫屋角やなり

関口権助

生国備後福山

元名吉助

大畑伝一郎

午卅五才

明治三庚午五月東京ニ而使ひはしむ給金一年十二両

東京京橋南伝馬町式丁目横丁松川町老番地所之内借地○

士族織田千里触下 鉦次郎養子

榎俊平

備中小田郡出部村庄屋

恵助

山本少貞懇意之者、おたのせわ致し呉れへき人

今戸町橋々二丁程川上らく焼せん餅の隣、松本出張所

南部精一

足立益之助事

大丸新道

花月や専助

□□□尾張屋敷当時鉄道方屋敷内

鈴木真之助

薩州大野□立事

駒通大祐

斯波平藏源道沖

大坂西横堀吉野屋町

駿豆甲遠信州之荷物積問屋

宮崎や吉右衛門

沼津表ニ引越候ニ付洞斎ニ相托置候御条之覚

墳墓之事

寺ハ江戸深川永代向富吉町

浄土宗 正源寺

毎月二日七日両日之内ニ墓参致し香花を供候事

盆暮両季は金百疋ツ、供養料として相納候事

但門番ニ金壹朱ツ、遣し又盆ニは蠟燭三挺遣し掃除并灯籠及懸竹をは

有ニ而為贈候事

先祖并諸仏之年回ニは其節毎前に取調駿府表より供養料送り遣し候間右を寺ニ納め墓参致候事

糺四郎之事 已十二月十三日横浜分へる

一糺四郎者横浜祖父母之処ニ而世話致候故先只今之処□世話も無之候へ

とも祖父母も老年之事故品ニ寄候而者世話ニ相成候事も可有之候間頼入候事

候事

おミよ之事 已六月東京分へる

一是まで月々里扶持金壹両ツ、遣し置候処駿府引越□後者衣服其外之料

とも別ニ金壹両ツ、合メ月ニ貳両ツ、遣し候約束ニ付金子ハ貴様手元江

相送り可申候間毎月相渡可申事

但おミよ者貴候人有之候節者何人ニ限らず遣し候心得ニ候間其日々暮

し方も困候程之者ニ無之候ハ、遣し度候間心懸世話可被下候事尤其節

ハ少し之金子を付候而も遣し度候間約束出来候ハ、其段御申越可被下

早速相送可申候

少貞江貸金返納方之事

□年半之年譜

一金貳拾両也

一同壹両貳朱

沢庵一樽之代

一同壹両也

薪之代

メ金貳拾貳両貳朱也

右者当辰暮分盆暮ニ金貳両ツ、返弁之約□ニ相成候間請取置おミよ之方

之入用ニ遣ひ払呉候事

島村利助分返金之事

一金四拾貳両也

薬性論三十部代

右は毎年盆暮金五両ツ、返納之積り願出候間受取候而おミよ之入用ニ遣

ひ呉候事 辰暮初而五両受取○壬申七月まで皆済也

浅草堀田原 春米屋

佐野や大助分返納米代之事

一玄米七石八斗 百俵二付金百四十六両貳分仕切

此代金三拾貳両貳分貳朱也

○洞斎手ニ而已正月分五月まで貳両貳分納め

○但利助手□□□□□申七月まで□□□□受とる是にて事済

右者丑年冬預り米を類焼之節ニ焼候□寅年分三ヶ年猶預之上巳年分返可仕旨之証書差出有之候間丑冬之最下御蔵相場を以来巳年分毎月金貳朱

ツ、上納致候様約束致候ニ付毎月受取おミよ之入用ニ遣候事若上納遅滞

致候ハ、毎月相渡候里扶持金貳両之内ニ而差引御渡可被成候事

右之通夫々相談候上帳面ニ致し洞斎ニ相渡置候

辰九月

山城屋佐兵衛之事

此外 三割五分勘定

山城屋佐兵衛

一金拾三兩貳分 薬性論九部分

右は辰九月六日ニ相渡候書籍代金当辰暮ニ洞斎来相納候様談候所ニ候間

請取置是又おミよ入用ニ遣ひ勘定帳ニ記し置可被下候事

島村利助板賃すり之事

一薬性論五十部 板賃ニ而すり候

右壳直段壹部ニ付銀百貳拾目

此内三十六匁 三割引ケ

三十匁 雑用

メ六十六匁引

残り金五十四匁之内

三分之一 銀拾八匁利助渡分

三分之二

銀三十六匁板賃

右之割合ニ而五十部之板賃

銀壹貫八百目

此金三拾兩也

右金上納候儀者来巳年三月五月七月九月之節ニ四度ニ相納可申但壹度上

納金七兩貳分ツ、此所巳七月分ハゆるし候間巳九月十二月となる○壬

申七月限ニ而受とり皆済

一佐倉家出入扶持之事

右者駿府ニ引込候ニ付断可申や之段舜海ニ問合候処良甫共相談致候処其俣ニ致置可然と之事ニ付先断無之方と申参候依之七月之前借分三宅

分受取呉候ニ付当暮分も相済候ハ、受取呉候様□家ニ頼ミ置□□□□

洞斎受取置可申一同托し置候 卯十一月分辰十月まで 一金三拾五兩

貳分貳朱也 右受取書ハ返書共ニ遣す 巳二月十一日 右四人扶持

分佐藤分送り来る此度□断り也

辰九月十八日

一駿府行船廻し荷物へハ印三拾貳番ニ而□拾六品○印四十四番ニ而

四十四品唐□□や仙吉分沢田長左衛門宛ニ而霊岸島本湊丁いなり橋之

際積問や大島屋三右衛門ニ送り状并書状付ニ而出す清水湊はさつまや

重兵衛着船なり

辰十月五日

一沼津行船廻し荷物へハ梅印三拾九番及番外瓶箱壹合して四十箇島村屋

利助分勝亦重三郎宛ニ而送り状相添大島や三右衛門ニ出す但請取書と

り有之

辰十月十四日

一二度目沼津行船廻し荷物へハ仙印三拾六番島村利助分勝亦重三郎宛ニ

而送り状相添大島や三右衛門江出す但し請取書□有之

辰十月十四日

一 莛包両懸壹荷莛小包壹ツ書狀壹通相添紀州中屋文右衛門分送り来る受
とりは利助ニ頼ミ駿府ニ送る

紀州分江戸迄運賃 一金壹分貳朱

江戸之車力 錢壹貫貳百文

又同 江戸分駿州清水湊迄

覚

□利助□

一金五百五両也 用意之為沼津ニ持越候金高

此内 新小判金八拾両

貳分判金四百廿五両

右辰十月廿一日沼津着翌廿二日勝亦重三郎ニ胴巻二ツ包の俵預け置此内

□□□判金貳百両也

右ハ辰十一月廿□日ニ預り証文を受取勝亦重三郎ニ貸渡す

一式分判金貳百両也 但此内貳拾五両者壹分銀ニ而十一月分入積

の内分出す

右者辰十二月 日預り証文を受取同月十五日返済候約束ニ而勝亦重三郎

ニかへす但店証文の事

庚午十月廿五日田口耕助帰東便ニ送る

一金五拾両也 是ハ島村利助馬喰町ニ開店致候ニ付かし遣ス返弁は

来ル申年可致候旨証書とり置

右者佐藤舜海まで送り舜海分利助ニ相渡し申候

沼津行

休 泊

十六日 品川 川崎

神奈川 程ヶ谷

藤沢 平塚

梅沢 小田原

箱根 三島

沼津

品川 河崎 神奈川 程ヶ谷 戸塚

藤沢 平塚 大磯 小田原 三島

沼津

沼津日記 明治元年戊辰

辰十月十六日朝五ツ時東京両国葉研堀の旧宅を出て元柳橋船宿梅花や之
河岸分主従七人駕三挺両懸一荷本馬壹疋をてんまと云船ニのりて十一字
過品川宿ニ着石泉ニ而午飯を食す其入用代

金三分と錢貳百五十文茶代として金壹朱を遣す○石泉ニ而東渚

人馬代金貳分壹朱を渡し幾次郎ニ

金貳朱を渡す○夕六字ニ川崎宿い□らご相模や十兵衛ニ宿す

瓢然携眷出東京一担薬囊而此生□道郷村知己少好山名水笑相迎

はたこ代壹人分ニ付錢壹貫三百文ツ、金貳朱□□壹貫二百□

七人分 金三分貳朱と錢七百文なり夜中相渡し受取置茶代

金百疋を投候 人馬賃錢として

金

同十七日陰

朝五ツ時前河崎宿出立十一字ニ神奈川着即時宮の河岸分乗船十二字横浜
着佐藤ニ至り岳翁同行ニ而アメリカ一番商館見物吉原伊勢楼荒井万年や
忠七ニ至り夜中夜店見物ニ出て寛齋ニ行逢

金貳両 家猪脂壹箱

同貳分貳朱 杖壹本

同貳分壹朱 メス壹挺

同壹両貳朱 上手袋 三ツ

同貳分三朱 眼鏡サヤ付二ツ

同三分 馬鞭三本

銭貳貫七百文 コム笛 十五

同五百文 早附木五箱

同三百文 サホン 二片

ノ

同十八日 晴暖

早朝弁天社内一見朝飯後岳翁山内と同行製鉄所見物横浜元町へ浅見社山頭へ上り帰路蘭医マヨイル之宅へ至りマヨイル二面会□太郎二対面して帰るお喜并ニ春東溟婢僕来る夕七ツ時佐藤を辞して東海道へ出る路ニ九一軒二立よる写真を致し夫々程ヶ谷へ出て伊豆楼へ泊る此処へ追触をいだす

同十九日陰微雨午后晴

払曉程ヶ谷へ出立正午藤沢昼飯夕五字平塚着亀田や某へ泊る煉心権三郎高麗寺村油や藤右衛門之伴藤七二面会

同二十日陰微雨

払曉平塚へ出立宿中之煉心之宅へ立寄り煉心権三郎同道へ而高麗寺村へ来り藤右衛門宅へ立寄り藤右衛門二面会其所へ而権三郎二分れ梅沢手前へ而煉心二分れ梅沢二昼飯二字少し過小田原着本町柳や由蔵へ泊る

同廿一日 陰時々雨

払曉小田原へ出立但馬荷大磯へ来らざる二困り幾次郎を小田原へ残し置一字箱根関門通行石内某之宅へ而昼飯相済幾次郎通行之事□□□□過箱根出立下山之処山中へ下之方へ而勝亦之迎次男馬之助手代駿之助へ出会日暮過三島へ着三島宿一泊候積込宿中混雑へ付年寄左平次弥右衛門之世話へ而人足出候而夜中沼津へ着勝亦二荷付夜十二字二平臥

同廿二日 晴

府中研海行書状江戸洞斎行書状横浜佐藤行書状各々通認む川村半左衛門二右之書状を托す○夜中按摩を頼む按摩出口町之城寿と云ふ○昼間近辺

を散歩してかぬき川を渡るとて

かぬき河水の清きにくらへなはいかに恥へき人のこゝろか イらふれは扱はつかしき人のこゝろかな

○夜中幾次郎着馬荷は三島に預け来る幾云杉田玄端を山上へ而ミる

同廿三日朝微雪十字頃分晴

早朝川上万之丞来訪駿府二伝言す川上云明廿四日西周助当地へ着す

同廿四日陰暖

一昨日廿二日よりリユーマチ熱へ而齒痛を發す廿二廿三共二午時頃微惡寒四支痛夕刻へ發熱深交熱減し朝へ至りて全く解す昨日へ發表分を服す今日之景況ニよりキナ塩を用ゆへし○紳六お喜婢僕と共に主人の案内へ付而之朝へ伊豆のきせうと云ふ所へ至る○夜中邦之助之寓居揚土の阿見やを訪ふ不在ニ□てあはす○今日熱發せず昨夜の微汗へ而解熱せり

同廿五日晴

阿部邦之助塚本勘甫矢田堀景藏二面会○午后川向を散歩○夜中相磯格堂父子豆州大仁杉村行三来る

同廿六日晴

阿部邦之助川村半左衛門鈴木与兵衛を訪高島友吉へ付□阿らひや馬を見中川飛驒隠居へ逢而帰る○午后竹海門人原宿寺町石井教馬へ托し書状壹通風呂敷壹ツを送る○矢田堀の府中行へ托して研海二のり壹箱坪井行之紙包を頼む○夜中杉村行三柳下昌達相磯為之助入門○昼中川半左衛門来る西周助を訪ふ

同廿七日晴暖

今朝四ツ時赤松着主従六人来る先勝亦二荷着夕刻宿やよし野やこうつる○大久保四郎太郎之家族一同昨日江の浦着へ而上陸蓮光寺二住居之由告ケ来る

同廿八日晴暖

朝大三郎旅宿を訪ふ昼前河岸の楼へ移る御馬乗方医師永井玄榮三島宿大

河周道来る伊豆北条寺家村之村長内田忠五郎二逢忠五郎ハ重三郎之弟なり○夜大三郎夫婦来る○昼前阿波屋彦兵衛を往て診す大久保主膳之寓三枚橋蓮光寺を訪ふ夕刻大久保之家来佐藤某使ニ来り鴨を贈りくれる

同廿九日陰風

大三郎夫婦母三人来る今日同町伊勢や之二階ニ移る○隣家油屋彦八之手代左兵衛来る○阿波や彦兵衛之薬を投す是沼津人ニ投棄之はしめ也

同三十□晴暖夜雨

今朝塚本勘甫を訪ふ西周助大槻保太郎大三郎来る大三郎と香貫ニ散歩す○明朝重三郎格堂兩人府中ニ行ニ付而研海ニ過日之返書并二品々一包ニ托し頼ミ遣ス幾次郎も右之供致し行五日之間之いとま遣す

十一月朔晴

午后荻生洪道之宅ニ行柳下莊兵衛之後家を診し午后洪道と同行海辺ニ行て夕刻帰宅夜中長三郎豊蔵同行ニ而大三郎之寓居ニ行く○紳六今朝為之助同行ニ而木負村格堂之宅ニ泊りかけニ行く

同二日晴暖

午后伊三郎阿已彦西周大久保阿部を訪ふ格堂之事を書付ニ致し渡し置

同三日晴暖

大久保榎軒同四郎太郎岩田緑堂来る○夜中武助東帰ニ□洞斎利助ニ書状を遣ス荷船の事ニよりてなり○夕刻紳六郎木負村かへる

同四日晴暖

紳六をつれ候而榎軒を訪ひ中沢善次ニ逢ふ帰路阿已彦ニよる朝杉田玄端川上万之丞来る夕刻矢田堀婦六来る僕幾次郎駿府より帰る○研海陶亭の書状来る○中西謙三の病家之転書来る

同五日晴暖

朝中沢善次来云鞠子新田名主伝右衛門方同居明六日朝船ニ而帰る研海行書状壱通を托す○病家診察後午后杉田之宿を訪□不在北郊外ニ散歩してまりこの宮ニ至り中野新田々村まで至り帰る○今日すんぷ行醬油二樽を

勝亦店分出すニ寄り牛乳之□松魚節廿本入し箱壱ツ一同と研海宅ニ送り方を店ニ頼む○大川周道来る明六日朝三島宿綿や松五郎往診を頼む○川上万之丞来る

同六日晴暖

朝分駕ニ而三島ワたや松兵衛ニ往診問屋莊兵衛ニ逢ふ
同七日晴暖

赤松荷物着ニ付研海之洋荷六箇受取直ニ幸便有之船ニ而駿府ニ勝亦を送り出す明八日大久保の佐藤□□行ニ付□□□印鑑壱枚田安御門印鑑三枚箱根印鑑一枚を包し書状壱通并風呂敷包菓子一箱を托し研海ニ送る
同八日晴暖

朝阿部ニ至る午後香貫二瀬川村ニ至り伴鉄太郎を訪ふ津田為春来る詩巻を贈る

同九日晴暖

朝矢田堀を訪ひ午后川上赤松来る

同十日晴暖

午后子供并赤松夫婦と同行海辺を散歩戸田鍵之助を診す

同十一日晴暖

午后矢田堀川上を訪ふ兩人之客舎鈴木与兵衛ニ飲す夜帰

同十二日晴暖

朝西周二魚を贈り鈴木二三便酒を送る○二度目之船荷并ニ近出荷ニツ越半出之船荷三ツ皆落手○成瀬善四郎来る

同十三日雨

今日終日戸を出てす○大久保榎軒の酒壺樽を贈り来る

同十四日大雨寒

朝大三郎方ニ行話を聞云開陽はしめ五艘之軍艦十月廿八日ニ箱館松前をとる依之東京分駿府ニ大譴責之云来るニ付一翁安部邦之助早打ニ而東京ニ出ると云○夜晴目下箱根山の嶺白雪を見る

同十五日晴風 夜藤沢を尋ぬ

同十六日晴風

朝杉田玄端を訪ふ○午后西周助大久保櫻軒矢田堀を訪ふ

同十七日晴風

朝幾次郎さわ出立駿府ニ帰る其便ニ鈴五郎の衣其外品々送り且書状をも遣ス○夕刻洞斎分返書来る即時返書認む川上万之丞宅状来る即時大久保の某所ニ頼之届く○夕刻白戸研海家来兩人来る

同十八日□

同十九日晴

同廿日晴

同廿一日晴

同廿二日晴

今朝石介研海出立歸府す

同廿三日朝雨

明廿四日渡辺一郎川上万之丞東京横浜ニ出るニ付渡辺横浜の書状を托し川上ニ横浜行之フラスコ代金壹両貳分を渡し洞斎行之書状を托す

同廿四日夕雨

明廿五日成瀬善四郎東京ニ出立ニ付ひん付と茶とを頼む但シ代金は不相渡○洞斎分書状来る船荷之事ニ付出せし書状之返書也

同廿五日晴暖

同廿六日晴暖

朝俊之助と同道畑見二行○駿府分書状を檣橋邦之助之妻持来る蒲公英エキス小一□陶亭分来る○矢田堀行之書状壹通来る直ニ届ける○川上万之丞の書状江戸分来る是も亦矢田堀ニ遣ス○今日町便ニ而駿府ニ書状壹通出す

同廿七日暖晴

同廿八日晴暖

同廿九日晴暖

同三十日晴暖

十二月朔陰

今日三島ニ行たるに小倉兵隊之宿札あるニ寄りて勝野父子ニ送る書状壹通を認め本陣ニ行て兵隊之頭来着之節頼ミ呉候様申置候○紳六郎今朝分西周助之方ニ遣ス金貳百疋小絞きぬころ一反□懸物遣し且学僕ニ金五十疋を遣ス

同二日雨朝分雨止陰

駿府分赤松大三郎之書状来る又中島桑次郎分川上万之丞行之紙包壹通□物来る共ニ受とり川上之分ハ矢田堀ニ為持遣ス○夜杉村煉心横山道庵之病用書状来る返書認

同三日晴暖

同四日晴暖

同五日晴雨風暴暖

今日昼頃分二男馬之助駿府行ニ付研海之処ニ書状を二通馬之助ニ托し送る

同六日晴雨風強

今日矢田堀分駿府へ油紙送届書状并八丈小袖壹ふり来る

同七日陰寒

同八日

早朝巢鴨之植木屋長太郎之伴孫八外壱人竹本要斎之転書を持来る

九日晴暖

正午出宅東溟同道桃郷ニ至り岩田緑堂を訪ふ酒を□夕刻帰る○塚本勘甫来り兼而頼ミ置候研海之妻矢田堀娘相談之事承知之旨申来る依之即夜書状認め研海をよひニ遣ス明日朝正六便ニ而書状壹通出入代金壹分中將様三日朝当宿御出服部綾雄着面会

十日晴暖

今朝洞斎六日付書状サレトニ子壺瓶添来る但鶴沢直太郎持参

十一日晴暖

今朝主上通輦

十二日晴暖日曜日

十三日陰る午后微雨

馬之助駿府分へる便ニ書状来る

十四日陰静

朝中沢善次東京分帰り通行懸立寄桐原真堂同玄海之書状紙包来る紙包ハ

兼而信州ニ注文之山眉紬なり壺□来る代金三両弍朱と申来る

十五日晴暖

駿府分おつる来る○雨

十六日晴暖

赤松今朝出立駿府二行

十七日陰雨夜雨甚

韭山ニ至る○相磯格堂今日陸軍医師となる○勝亦重三郎今日勘定所用達となる

十八日晴風暴暖

杉浦兵庫大久保主膳来る

十九日晴暖

おつる同道矢田堀二行○横浜佐藤分書状到来葉ひん沃陣ホツトアス良順
斎藤事申来る○駿府研海分書状来る

二十日晴寒

廿一日雨

今早朝おつる出立矢田堀娘同道○午后横浜佐藤行書状を出ケリ

廿二日晴暖

川上万之丞分書状来る云東京府ニ於て開成所筆生ニ被召出成瀬善四郎来着

廿三日晴暖

成瀬善四郎持越之洞斎分之届物并注文之油類来る洞斎分之駿府行之のりも有之

廿四日陰寒夜雨

九子新田之中沢善次分百調散三百帖分注文致し来る但し一帖之分量一両三分懸りニ而一帖代三分ニおろし遣す紙類は袋包紙共一切先方ニ而却而送り賃銭ハ此度は先此方ニ而出し置○小杉右藤次書状届を頼来る

同廿五日大雨

終日不出門

同廿六日晴暖午后分夜ニ懸風雨雷一声

今朝陸軍方分御用之儀ニ而会所ニ出候様達書参候ニ付罷出候処服部綾雄殿左之通被仰渡候

林梅僊

陸軍医学所御用重立取扱候様可被致候依之為御手当金四百両被下之

綾雄殿ニ為礼廻勤帰路杉田ニ立寄候処不在不面会

同廿七日晴暖

今日研海分急状来り病院頭ニ相成り席ハ陸軍学校頭取之次御役金四百五拾両御手当金弍百両坪井戸塚同並席は御書院頭之次御役金三百七十両御手当金二百五拾両之由申来る又矢田堀縁談之儀早春急ニ引□度ニ付矢田堀ニ相談早々申越候様申来る○岩田分取置候味噌壺樽今晚安太郎□之便ニ而駿府ニ送る清水湊は三穂や源七なり○今日拙作を賦す

檻前流水檻前山暮雨朝晴眉睫間以遂慰

平生帰殿志山容水色是郷関 是字一作捨

同廿八日晴暖

朝五ツ時頃佐倉藩井上欽助駿府通行懸舜海□之書状持来る云府中之品川やニ泊り正月四五日頃出立と云即日返書認め勝亦店ニ頼ミ置○矢田堀相談相済結納も相済候ニ付其段正六便を以て飛脚や分駿府ニ申遣ス○東京

緒方玄蕃少允の書状来る

同廿九日晴暖

今晚はしめ而石橋帆平ニ参る○丸子新田組頭藤平方同居中沢善司ニ送る
百調散三百帖分二袋包を今日善司之甥樋野洋太郎と申者受取ニ参候ニ付
渡す

明治二己巳年

正月元日晴暖

朝五ツ時前殿拝賀御名代服部綾雄席順は西周助杉田玄端梅仙長太郎阿部
邦之助矢田堀江原立田 前席其次一等二等教授方其次

○梅仙

十徳法袴

同二日朝晴午時曇夕雨夜風雨

朝六時格堂同行出宅半里余にして灯を消し原宿を壺里余過而杉田来□会
シ十一字三十分頃吉原の壺里程西の立場ニ而昼休昼飯代金□百疋四字前
由井宿入口ニ而裡軒梅潭ニ行逢ひ大久保之書状岩田之書を渡す四字由井
着本陣郷右衛門方へ玄端格堂洪道一同止宿

同三日雨

由井河興津川水増往来とまるニ付滞留昼四字四十分兩川明候よし申来る
駿河国阿部郡有渡郡庵原郡富士郡志田郡益津郡駿東郡ノ七郡
凡高 式拾四万六千八百七十四石四斗壺升四合四勺四才

内訳 八万七千九拾式石五斗式升式合三勺六才 御料高

拾四万七千三百拾六石○○○七勺五才 私料

壺万○三百式拾八石三斗○六合五勺 御朱印

二千百□十七石○三升六合八勺壺才 御除寺

右は天保五年写之とある由井郷右衛門所持駿府支配町家記と称する
書籍の抄出

同四日晴

朝五ツ時頃由比出立江尻宿之西の□頭ニ而昼飯七ツ時駿府四ツ足御門前

元学問所即當時之仮病院研海御役宅ニ着杉田玄端も御役宅表座敷ニ泊る

洪道格堂兩人ハ兩替町式丁目□□□□□宿

同五日

今日正六便ニ而矢田堀ニ書状を出たす

同六日小雨

病院頭同頭並玄端梅仙一同集会病院出役医師同陸軍医師之エキサーメン
有之○今朝前段雇人仕出しニ而矢田堀ニ書状を出たす坪井書状も此内ニ
あり 一金六兩 此度駿府行之御手当之内受取

同七日小雨

午后杉田坪井一同宝台院ニ出て 前上様之御きけんを伺○夜中沼津ニ
飛脚至り矢田堀之返書来る坪井江の書状も来る○戸塚春山一同越半楼
ニ上る○夜中勝亦来る袴羽織を与ふ

同八日小雪寒

研海玄端応安一同登城 中将様ニ拝謁○夜中研海婚姻□□□□□西洋が
く二枚をかつまた二渡す

同九日晴風

今朝杉田玄端出立

一金六兩也 居風呂之銅壺代渡し置

一同 牛肉五斤取入

代金ハ駿府へ出し置

同十日晴風

弘暁格堂同道駿府出立倉沢而昼飯吉原と原之間ニ而日暮夜四時沼津帰宅

一杉田玄端林梅仙 当地江罷越候節拝診をも可被致候事

一於駿府中老衆へ被申付溝口八十郎殿被仰出候○信良取次

同十一日晴

同十二日晴風

御城出勤自西之返事致し矢田堀二行

同十三日晴風

□恙終日平臥但朝に杉二行正月七日出洞斎書状来る其内去冬字引書来る

集金之覚此分二月廿日渡し利助少貞の金入り勘定申来る

一金拾三兩貳分 山城屋佐兵衛分受取

一同貳拾四兩貳分 錢七百文 堀田家御扶持代金受取

一金壹分壹朱 利助分受取反古代

ノ金三拾八兩三分壹朱と錢七百七文

濟金之□□

一金壹兩三朱 サントニ子壹瓶代

一同壹兩壹分 米屋江暮歳

一同三兩貳分 眉脂代金

一同壹兩貳分 米やより扶持金貳兩之内

ノ金七兩壹分三朱

差引残り預り金三拾壹兩貳分貳朱と錢七百〇七文

右之通私方江預り置申候外二少貞者旧冬月迫已来面会不仕不遠内二者持

參可仕と推察仕候 正月七日

同十四日晴暖

御殿ニ出勤○今日柳下章達下総へ出立暇乞ニ參候ニ付洞斎江返書を頼ミ

出たす其内島村利助ニ納金遲滞之事を尋遣す○丸子新田中沢善司分書状

来る○糺四郎二十金送り候様ニ洞斎ニ申遣す

同十五日晴暖

矢田堀駿府分かへる其便ニ書状打紐牛肉来る

同十六日陰

早朝小杉をさそひ大久保一同長沢村之五平□□□□□□□□□□

同十七日晴

出殿婦路病院地所見分二行今日矢田堀二行○御払米願書差出す成瀬之船

來種物を渡す

同十八日雨

夕刻大久保二行明日櫻軒駿府行ニ付研海江之書状并なめ物入瓶壹ツ頼む

此書状中肉店出店之事さゝめそく申遣す○今日御聞木背村十六日夕七時焼

くかく堂之隣家までやけると云

同十九日晴靜

御殿ニ出勤夕七ツ時過帰宅

同二十日晴暖夜南風

医師之儀ニ付 天朝分御触書出る

医師之義者全性命ニ關係シ実ニ不容易儀ニ候然処近世不学無術之徒猥

りニ方藥を弄し性命を誤り候者不少やニ相聞へ大ニ 聖朝仁慈之 御

微意ニ相背き甚以不相濟事ニ候今般医学所御取建相成候ニ付而者乞度

規則を相立学之成否術之工拙を篤と試考し免許有之候上ならては其業

を行ふ事不相成様被遊度 思召ニ候条府藩県ニ於而兼而此旨相心得治

下医業之徒江申聞置各々ニ覚悟を以學術を研究可致旨 御沙汰ニ候事

十二月 行政官

右之通行行政官分御布告ニ相成候ニ付御領内医術迄ニ御取締相立候様之

御趣意ニ候就而者以來市在医業致候者願濟之上ニ無之而者妄ニ開業致

問敷且壳藥施藥等は藥種不分明之品有之候而者別而人命ニ拘り候儀故

是迄在來之品なり共藥法巨細相認め可伺出候

右之儀不洩様可被相触候 正月

同廿一日晴暖夜雨

同廿二日雨風暖

□村煉心之書状来る○川上万之丞の書状来る藤沢渡辺之届紙包□海苔送

り来る

一金三拾兩三分錢百八十六文 辰十二月初御手当受取

同廿三日陰夜雨

夕刻分服部ニ参集

同廿四日雨

出勤

同廿五日陰

駿府の大久保櫻軒之書状来る返書を石場斎宮ニ頼下石田村之村医石井成斎来る同村之農茂平之伴也植松与右衛門分浮島原之蜆を送り来る

同廿六日晴

出勤○夕刻分病用ニ而格堂同行豆州長浜大川四郎左衛門ニ行

同廿七日晴静夜風雨

朝□字長浜出船十字帰宅○午後出勤○夕刻山村惣三郎来る東京ニ行懸也横浜ニ伝言洞斎ニ手紙并ニ送り物平塚煉心書状并ニ諸買物代金五両と当年佐倉□浄圓童女十三回忌之供養料金貳百疋包ニ横浜迄送り序ニ佐倉ニ送ることを頼む

同廿八日風

昨夜邦之助府中分帰る今日於御殿府中書状を受取○夜□横浜行半切紙并ニ糺四郎江の書状と金貳百疋とし玉二□□

同廿九日陰

三浦文卿来る横浜の便書あり云本年杯は糺四郎もアメリカに送るへしと

○

□□□□昨年八月已来入用勘定書来る

当已春洞斎分送り来る金

残金七両貳分

一金廿兩也

合メ金廿七両貳分之内

一金拾五両貳分壹朱と錢三百五十六文

糺四郎辰八月□□□□

上其余諸入用共

一同三兩三分三朱と錢貳百文

藥種其外相頼候分之代料

メ金貳拾三兩貳分五百五十文 差引当已春殘金三兩三分三朱と九十文

右之通申来候故近日之序ニ又々拾兩丈も遣し積之事

同三十日晴

一金拾壹兩壹朱と錢貳百七十貳文

右ハ御用ニ而駿府行正月二日分同

十日迄九日之間諸賄并人足賃被下

也

二月朔日

出勤○晚四字分西周助ニ至る右者今日紳六郎西ニ入家之心祝ニ付盃有之赤松矢田堀家より

一金拾兩也

大小刀之料

一同五百疋

酒

一同五百疋

肴

一同百疋

下男下女ニ五十疋ツ、

同二日雨

同三日

今日原宿ニ行○成瀬善四郎同道植松与右衛門ヘナス種物九十品を送る

同四日晴 肉店や常七府中分来る研海書状も添来る

同五日晴

今日原宿ニ行

一金拾兩也

右ハ糺四郎入用料近日赤松横浜ニ行ニ付送り候

間今日赤松ニ渡す□□封書

同六日晴

今日八まん前本光寺隣元駒留陋斎之宅ニ移る

同七日陰

卜居之届を出る

同八日大風雨昼十二字三十五分ニハルモ二十八度五分に下る

同九日夜晴暖

西ニ至る一昨七日紳六郎養子願濟之由周助申聞候ニ付即時右之故を認め府中ニ而も願書出候様申遣ス但明後十一日服部府中行便ニ送る○赤松母

お貞来る○今日日曜日ニ而はしめ而新屠之牛肉を送り来る○三島明神祭
礼之由ニ而参詣之人多し

同十日夜晴

出勤

同十一日晴

昨夜櫻軒婦宅之由ニ而蛤持参宅ニ来る研海分書籍二冊書状沢山来る

同十二日陰

明十三日服部藤沢府中ニ出立ニよりて藤沢ニ昨日之返書沓通頼む

同十三日陰

同十四日雨

今朝赤松東京ニ出立

同十五日雨

同十六日晴雨ソソデなり

同十七日雨

お貞来る○洞斎真堂玄海分書状来る洞斎常ニ利助少貞入金有之段申来る

同十八日晴風

同十九日晴

同廿日雨

今夜櫻軒分手紙来る○洞斎分申参候集金の書付左之通

辰十二月集金之分

十二月十六日

一金拾三両貳分 山城屋佐兵衛

□□

一同三□壹朱 反古代料

同廿□□

一同□□四両貳分と錢七百七文 堀田家御扶持

□月□二日

一□□貳両なり 山本少貞

巳正月廿日

一同□□両なり 島村利助

メ金四十□□□□壹朱と錢七百七文

渡金之分

辰十二月十六日

一金壹両三朱 サントニ子壺瓶

巳正月四日

一同三両貳分 □□□山眉脂代

同正月五日

一同壹両壹分 米や□□心付

同正月廿日

一同貳拾両也 横浜糺四郎入用

一同三両也 巳正月二分里扶持

メ金貳拾八両□□三朱□

差引残り預り金拾六両三分貳朱と錢七百七文

同廿一日晴

一金三拾三両壹分 巳正月分御手当金受取

但毎月之永八十三文壹二七五之分は集めて二季ニ相渡候由

同廿二日晴

駿府ニ藤沢便ニ書状を出たす○東京洞斎ニも田村英斎便ニ書状をいたす

同廿三日晴

今日ソソデなり西赤松家内一同千本之浜ニ行き地引網をひかせる

同廿四日

同廿五日

同廿六日晴 すん府分書状来る

同廿七日晴

同廿八日朝雨午后晴	沼津病院御開場出勤十二字退出
同廿九日朝雨午后晴	同十八日晴夜風強
今夕佐倉舜海を使人兩名来書状并海老干送り来る○赤松大三郎来る	病院当番
同卅日晴 今日そんで	同十九日晴
洞齋来る	駿府研海を書状来る坪井大病之旨申来る赤松江荷物之儀二付伝言申来○
三月朔日雨	山村を書状来る火急之事并横浜を清水二船十日頃二着候旨申来る
同二日晴	同廿日晴
洞齋帰る午后おつる綬七郎府中へ来る○山村東京より帰路立寄り午后出	同廿一日晴
立	当番
同三日晴	同廿二日雨
船津興隆寺二行帰路与右衛門二立寄り三次二出会	今朝医局便二而横浜二書状をたす
同四日晴	同廿三日
同五日陰	同廿四日晴 今日当番
同六日雨	今日桐原真堂を書状来る○伊東図書少允来る
同七日晴休日	同廿五日晴
同八日雨	同廿六日
今日御殿二而立田政太郎御払米七人扶持分は御払二相成候様可被致旨申	同廿七日晴今日当番之処明日之文卿と相替
長太郎帰六玄端座二あり同聞之	同廿八日晴今日当番○研海を書状来る
同九日雨	同廿九日晴今日浜行
同十日陰 西赤松矢田堀塚本家来	同三十日雨
同十一日晴	当番
同十二日晴	四月朔日晴
同十三日晴	同二日晴
同十四日雨	午后 中将様御迎として本陣清水二行き綾雄殿はしめ上士一同御目見夫
同十五日雨午后晴	を御供差上申御馬屋小学生徒躰御覧済二而大手御橋迄御見送り申候
同十六日晴	同三日晴
同十七日晴	同四日晴

同五日晴

今朝五字おつる緩七郎出立亀吉送り供

同六日晴当番

小倉勝野兵馬大城戸隆藏松田寿太郎分書状来る三島駅ニ而認書之返事なり同藩金田雄太郎者東京旅行懸四日当駅肴や二止宿して頼ミ置候由

同七日晴

同八日晴

昨日十一字分豆州熱海々道輕井沢村々長五左衛門方ニ赴き一宿今日十二字頃ニ帰宅

同九日雨当番

同十日十一日十二日十三日十四日十五日十六日

同十七日陰 今日休局

同十八日雨 玄端今日東京ニ出立□□□□文卿と隔はんとする○明日分キュンセの□スを始め

同十九日雨横浜分返書来るアルセ□の代申来

同廿日晴 昨日河津便へ府中ニ書状を□□

同廿一日晴 昨日府中分書状来る○今朝勘右衛門手代東京ニ出立二付洞斎と横浜ニ書状出す但横浜江神奈川堀部や□出す

同廿二日

同廿三日晴朝六字出立夕五字十分金谷松や忠兵衛泊

明治三年五月武州入間郡黒瀬村之某之□□記す

青茶摘手間 壺ノ目ニ付 四百五十文 十貫文也 壺両

製茶手間食料共 一日壺人ニ付 金壹分

但一日壺人ニ付本茶六貫目分七貫目位を製す

青茶 壺貫目ニ付 本茶百六十六匁を得る也

青茶壺貫目を製して本茶百六十六匁を得る其入用

摘手間 四百五十文

製茶手間 四百式十四文 ノ壺貫百式拾文

薪ホイロ紙粘等 式百五十文

本茶壺貫目之元価凡式兩と式拾目
當時横浜之相場三兩式朱位也

庚午四月朔日御改革人足賃錢

一錢三拾八貫八百文 品川宿分伏見宿迄人足壺人之賃錢

此金三兩三分式朱四十八文 金壹兩□□文相場

一同式拾七貫六百廿四文 沼津より伏見まで右同断

此金式兩三分と百二十四文

五月朔日

同二日研海きケン聞として来る

同三日

同四日

同五日今日休局

同六日

同七日今日玄端帰沼廉卿も同道之由

同八日雨今日篠原貢堂検査

同九日晴朝九字出立綾雄殿西藤沢立田塚本外壺人研海拙老と七人同道府中ニ行蒲原一泊

同十日朝正六字蒲原出立江尻昼食ニ而昼四字頃府中着○倉沢之山ニ而□

□□木を見付くる○賀古源吾ニ逢深沢甫庵之書状来る 甫庵元の名は貫一駿州志太郎下青島村三言家立場住居

同十一日出殿進達

同十二日戸塚春山同行遊歩

同十三日出殿進達

同十四日府中城休日○府中沼津両病院条約書出来各位押印二冊を分ち蔵む	
同十五日沼津病院府中病院と一所二相成候二付而者位階俸金御手当共改正御書付出る	
学校并生育方取扱	
学校頭取	江
病院頭	
沼津病院之儀已来駿府病院之支配と相心得当地病院分何レも出張相勤候儀と可被心得候就而者当地并沼津共向後御役名階級等左之通可被心得候	
一病院頭病院頭取病院頭並何レも一等医師之事	
但席并御役金御手当金は是迄之通り二候事	
御役金三百七十両	
御手当金百三十両	病院一等医師
席沼津一等教授方之次	
同三百式十両	
同百両	同並
同各所添奉行之次	
(付箋)「二等並之御手当金百五十両とありしは百十五両二間違候間□□□□達し置二相成候様致し度旨を□院頭ニ申遣し候間違而□□□□も十□両ニせされは不都合なり」	
同式百七十両	
同百両	同二等
同二等教授之次	
同式百三十両	
同八十五両	同並
同奥詰之次	
同式百両	同三等
同七十両	
同御書院組差図役頭取之上	
同百七十両	
同五十両	同並
同学校教授方三等之次	
御手当金百両	無級医師
右之通可被心得候事	
右之通於駿府綾雄殿御渡しし梅仙出殿受取之	
六月廿一日	
昨廿日駿府分申参候之写	
大目付	
御目付	江
去十七日	
御参内被遊候処別紙之通被為蒙 仰候段東京分申越候二付乍恐悦今廿日詰合之上士 御目見已上之分謁有之候間其段向々江可被達候尤別紙之趣詰合無之向々江も不洩様可被達候 六月廿日	
徳川新三位中将	
静岡藩知事被 仰付候事	
明治二年己巳六月	
徳川新三位中将	
今般版籍奉還之儀二付深く時勢を被為 察広く公議を被為 採政令帰一之 思召を以て言上之通被 聞召候事 六月 行政官	
駿州府中を静岡と御唱替之儀御伺相成候処御伺之通御唱替相成候段御達有之候間此段向々江可被達候	
六月	
己巳八月昼日静岡行日記	
一弁当箱小シ分	

一女弁当はし	巳七月分	巳九月分
一本草書三冊	一是ハ一季のはすをゆるす	一同七両貳分
一コットントリース壺反		是ハ直ニ横浜ニ送る積り
一野州来状壺通	巳十二月十二日	
一二十五円持参	一金七両貳分	横浜佐藤
山本少貞五ヶ年ニ請候金	母者東京ニ而	
一金貳拾貳両貳朱	わた□より	
辰十二月受取	申来る	
一金貳両也受取	明治三庚午年正月	
巳十二月分	山村送り	
一金貳両也受取	一金拾両也	
午十二月	右者山村江返済可致金二十両有之候其内先拾両、但五両札二枚なり、当	
一金貳両也受取	午の正月八日藤沢長太郎静岡便ニ相頼ミ書状ニ入組紀宅まで送り届申候	
島村利助返事分	遠州中泉ニ送り事申遣す但受取書をよこし候様山村ニ申遣し候	
一金四拾貳両之口		
辰之暮	米屋代助納金	
入一金五両受取	午四月	未七月
巳之暮之分	一金貳朱也受取	一金三両也受取
入一金五両壹分貳朱と六両		
右者東溟の家ニおくり候書物	庚午春二月十一日	
代差引ニ而東溟分受取	林梅仙江	
午十二月	林梅仙	
入一金五両受取		
島村利助分返事分	御用有之候間静岡表江罷越候様可被致候尤差急候儀二者無之候間家族	
一金三拾両也	引纏可被相越候	
巳三月分	右次郎八殿御渡候ニ付而静岡病院分相達候旨ニ□今朝玄端相渡候	
一金七両貳分受取	同十二日晴朝六字沼津出立同夕六字江尻宿泊り京や源兵衛	

一金貳兩三分壹朱 道中入用静岡迄

但金四拾五兩持参

一同拾兩也 小太郎初着代

一同拾兩也 お鶴おたつ江土産

一同壹兩也 おミほ江同

一同貳分式朱 同下女下男

一金貳分 金五郎源七郎

一同五百疋 俗事役

一同百疋 坪井ミりん

同十三日晴朝六字江尻出立四時静岡病院着

同十四日雨休息

同十五日晴政事庁江届ニ出る○三位様前様御きけん伺戸塚ニ行

同十六日晴夜中服部ニ会す

同十七日陰矢田堀伴着○伊庭熊太郎も今日着すと云

朝の内東京鈴木観月院分書状来る一同近々御所置相済候由

一明十八日赤松遠州ニ出立遠州見付宿入口足袋や松風の隣

中略 宮崎志津世

同廿一日晴昨夜坪井信良帰着

林梅仙江

林梅仙

遠州中泉江此度小病院御取建可相成候ニ付同所之儀其方江取扱被

命候間彼地ニ罷越其場所并ニ取建方見込取調可申聞候尤林紀坪井信良

より談候

同廿二日晴明廿三日遠州中泉江出立坪井并ニ調役山下巖同道

一金拾八兩也 遠州中泉行ニ付二十日見込ニ而受取但人足賃銭別なり

一日金三分と永五十文ツ、

同廿三日晴朝六字静岡出立夕六字金谷着松や忠兵衛泊

同廿四日雨朝六字金谷出立正午時懸川着石原や某泊

町医師 内田泰堂

水野東朔

針科 小原尚賢

川本門 岩崎良庵

北在懸川在くらみ村 岡田左平次

東在サイ同前玉村 本間栄五郎

同廿五日晴朝正六字懸川出立昼十二字三十分中泉着百姓宿わしのや二泊

る

無級御雇医師 小川清斎

袋井東ミつ部村 足立貫一

見付西の小路 柴田荆斎 三十八才

周知郡西米倉村 杉田門 北島三託 三十八才

豊田郡懸塚村 緒方門 秋本成蹊 三十九才

友雄父 今川宗元 十六才

久野玄卓

鈴木宗仙

堀越 今川友雄

遠州の才子 中泉町 青山忠平 五十余

同 懸川仁藤町 鈴木陸平 宿役人

○三ヶの坂分十町程東西島菅野谷主税の陣屋明屋

○貝塚長谷川久三郎陣屋明阿屋

右二ヶ所は引きて病院ニ致し候事

同廿六日朝陰昼雨 岩田緑堂測辺徳蔵宅ニ行面会御用談相済但坪井同道

諸家陣屋の図を借歸り写す

午前宮崎志津世のかり宅を訪ふ志津世松風岐一郎案内ニ而城山ニ行同所

小亭二而午飯岐一之弟辰巳や八郎岐一の分家松風や平右衛門医師石川愿堂五十一才岩崎桃溪卅一江塚檢一郎二十六才二面会皆見付駅住の漢医也江塚省三二十八才二面会鎌田村医也○帰路堺松庵の鳥居道の北二有之畑地林地を見分

同廿七日陰雨朝坪井同道岩田緑堂より行地面并二明陣屋の事を談す帰路昨日一見の堺松地所見分夫レ独り忠平方二行面会して地面之事を談す○十字過忠平来る中泉役人名前書持来る

組頭喜平 名主孫次郎 同 新平 同 新三 但庸平は忠平之伴なり
篤平 総三郎 五郎平 庸平

周知郡飯田村○静岡入門済

一緒方洪庵門人嘉永子年今開業午四十九才 本間玄格

同下山梨村○静岡入門済

一漢家二而横須賀常盤元順門人午五十才 小野田斎伯

右今日面会 同萱間村静岡入門済

一漢家安政寅年今開業未面会 鈴木宗元

一山村惣三郎之事代り有之候へ共承知之趣代り之心当有之候二付早速二懸合□可申候○其間病院之事兼勤之人命し呉候様申候処夫レは惣三郎二内談可然惣三郎今無事を申候へ者此方二而者含ミ居り候旨緑堂申候依之今晚惣三郎二談し候積り也

中泉久保村 荻野泰庵 三十一

同坂上町 本間泰順 六十五

一夜中山村惣三郎忠平来る 一昼後見付宿名主古沢五平面会但忠平同道二而来る

同廿八日陰雨雨晴忠平来志津世松風平右衛門来る○夜貫一春海来山村惣三郎忠平来る

同廿九日晴風 山村山下と□□大久保村の元鍋島の陣屋之明長屋を見る
○坪井今朝四時横須賀分帰る○明朝出立坪井と一同浜松二行人足を申遣

す○

遠州豊田郡方正寺村

漢法内外科 藤井東岳

静岡木南広平門人安政三年開業 四十才

此度於中泉病院御取建二付御持場内医業之者御取調別紙雛形之通り為御差出早々御申越有之候様致し度此段及御懸合候

二月

右之通相認め測辺徳藏安田十三郎高力晴江に送る

同三十日陰 朝七字中泉出立十字浜松着伝馬町大米屋市郎右衛門泊○築

山殿御墓拝見帰路大庭良三二□□土医面会

浜松田町 鈴木宗甫 祝田村 萩原元良 市野村 市野正庵 四十八才

刑部村 内山玄洲 刑部村 内山俊良 三島村 藤田玄碩 四十二才

瓜内村 斎藤留堂 笠井村 大須賀鎌 西村 間宮精 三十六才

三月朔日雨朝浜松出立十字過中泉着○夕刻山村惣三郎来病院建屋三軒引移し入用積り書持来る名主庸平来る夜中忠平来る

同二日晴朝中泉出立見付の江戸や二立寄る袋井分東くつ部村足立貫一二立寄る正午懸川二着石原や二泊る○勤番頭山田虎次郎郡政多田重三郎宅二行面会○夜岡田左平次本間榮五郎二面会病院永続見込書頼ミ置

同三日雨朝七字懸川出立島田二而昼飯夕四字前二藤枝宿着朝日楼二泊る
○島田藤枝の間青島と云立場より少し東二而三間屋と地二住する医深沢甫庵二面会甫庵は先年余遊崎中の門人也崎二而別後はしめ而之面会即其間三十年也

同四日雨朝六字過藤枝出立十一字静岡着○沼津分之来状文卿分同東京今之来状を受取る

同五日雨明六日江連泉三郎東京横浜二出立致候二付横濱佐藤二書状を出たす但土圭直し代不足而已

金貳分 土圭直し不足金

同貳両 糺四郎沓之代

右を書状ニ入組泉三郎ニ托し送る

一夕刻坪井道同ニ而一翁殿ニ行見込之書物差出し置但梅仙一旦帰沼致し沙汰を相待可申旨申上置

同六日晴先触人足帳を□□□□両名の玄端行書状壹通并御のしめ八反分受取

同七日陰朝七字僕瀬平并二矢田堀之僮益蔵を連れ出立十一字倉沢ニ而昼飯其夕七字過沼津内着

同八日陰午后晴朝玄端書状を病院ニ遣し午后熊太郎をよひのしめを渡す三月十四日静岡分書状来る其内ニ調役より

一金拾両三分と永五拾文 林梅仙分

錢五十八貫六百七十文

右者遠州行御手当受取静岡ニ預り置候ニ付先日受取候拾八両は其俣かへし呉候様調役申聞候ニ付岡之上御かへし可被成候段おつる分申来る○右ニ付沼津出立の日分静岡逗留中及静岡分沼津ニかへり候までの日数十四日の間の日数并ニ往來四日之道中人足賃は何レ分出候や之旨を山下巖まで尋遣ス

同十七日 今朝一昨十五日出之静岡林紀坪良分の御用状来る其節ニ病院は懸川ニ定り候間早々出岡可致候旨也但家族は後日引纏候而もよし依之一人と文周同道ニ而行明十八日出立白戸ニ引合勤番方分先触も帳面も出し貰ふ○今朝横浜分急書状到來長谷川之事申来る返事を直ニ認め明日飛脚屋分出す

同十八日曇 朝四字過沼津出立蒲原ニ而昼飯夕八字ニ静岡着江尻宿少し前分微雨

同十九日雨

一金貳両

沼津分静岡まで

一同貳両

同二十日晴 赤松しつ枝ニ印刻を頼む

入一金九両也

一金壹両貳朱又壹朱

懸川行十日分病院分受とる
延白紙半束四十八枚、巻白紙一包、紅唐紙半枚

一同貳両と錢貳貫文

静岡分懸川まで明廿一日道中用文周二渡し置

同二十一日陰晴時々雨 朝五字静岡出立島田ニ正午昼飯夕六字二十五分懸川魚町春日や与右衛門方ニ着○山田虎次郎使来る○泰堂小原尚齋来る同廿二日晴朝山田虎次郎宅を訪ふ同僚内藤七太郎來会依之病院之事を談す虎次郎同道ニ而御殿ニ行明屋ニ軒并ニ寺壹か所を見分す午前かへる○留守中ニ岩崎良庵来る

同廿三日晴午后山田虎次郎永谷三藏同道脇村字六間町元戸塚三節居家跡見分ニ罷越す○夜中足立貫一小川清齋來

同廿四日晴午前山田虎次郎来る病院建立の基礎入用書并順略書を見る是左平次英次郎ニ渡すへき云と云其節種痘仕法書を虎次郎ニ渡す○青木陽藏來る○夜中山村惣三郎分の書状北川令次持參今朝静岡より御用状到來病院御用取扱被命候ニ付一兩日内ニ懸川ニ出る旨申来る

同廿五日晴朝食後文周青木陽藏山下巖と共に北原川元大河内綱之丞陣屋見分として罷越歸路原川立場ニ而昼飯

金壹分貳朱と錢五百十六文 四人分

二字帰宅○夕刻山田虎次郎宅ニ行書生寮之図を渡し陣屋之事又病院立地元有來り井戸の涸不涸新規井戸ニツ惣三郎取調被命事医士格式俸金高并今度病院地面内ニ其広狭ニ応し御役宅立地坪割之書付相渡し置○夜中雨同廿六日陰風 日暮山ニ行虎次郎ニ面会原川陣屋之図間とり引直し之図壹枚□宿院之略図壹枚相渡す但二枚共写し之上かへす旨

同廿七日雨風午后山村惣三郎来着同人申渡之大意

林梅仙懸川出張中同様御用取扱候様被命○夕刻山村同道二而山田二行

夜五ツ時二かへる

同廿八日陰

同廿九日晴夕刻山田虎次郎左平次英次郎之趣法立之書持来る但尚懸引相談之上者静岡ニ可申送□□候ニ付明三十日出立之積り山村も同様

同三十日陰晴雨霰朝四字二起る五字出立夕六字静岡着

四月朔晴早朝一翁殿二逢懸川之模様話候処主意相違之旨申被聞候ニ付御主意を改而伺候処左之通り

一病院はすへて上之御入用ニ而御取建ニ相成候事

一薬剤器械書籍其他一切入用ものすへて上之御入用ニ而有之候事

一病院御取建ニ相成り候へ者遠州地内ニ於て寄篤之者も可有之候左候

へ者献納物等致し候節者御受納にも相成候と申丈之事ニ候へ者病院

御取建之事ニ付左平治英次郎等二一切関係致し候ニ不及候

右之通被申聞候間即日虎次郎惣三郎ニ申遣し早々病院取建ニ相成り候様

懸合申候

右之通ニ候へとも総て上之御入用なら者懸川ことき悪地ニ御取建被成候

よりはむしろ善地を御撰被成候方かと奉存候旨勘太郎を以て御殿まで申

上候処いづれ此度御供ニ而遠州一順被致候ニ付順見之上ニ致被申候依之

一と先帰沼致し可申となる○今日坪井帰る

同二日 今朝五ツ時三位様遠州御順見として御出駕紀御見送るニ出る

同三日晴

同四日晴朝静岡出立倉沢昼飯夕七ツ時頃吉原駅扇や泊り

一金五両也

一同壹分壹朱式百文

一同壹分式百文

一同式百足

さく蔵ニ渡ス

倉沢入用

岩渕奥右衛門方心付

香峰画料

一同壹分

一同式分壹朱

但五両之内

一金式両壹分壹朱と銭式□□文 静岡分沼津まで五人一分之人足代

并ニ奥津川々越

一金式両壹分式朱と銭三百八十三文 同相対人足四人人足代

同五日晴朝吉原出立十字帰宅○藤沢分浅野江の届着物類田村英齋行末次

繁男行書状届之

同六日陰午后

同七日陰午后雨 午后糺四郎きく蔵と出立静岡ニ行

一金式両

□□式両

同八日 夕刻格堂来る○みそ壺樽を静岡ニ送る

同九日 書箱壹ツ柳行李壹ツ夜具包壹ツつくえ壹ツメ四ツ静岡ニ送る前

日之みそと一同ニかつまた二頼ミ船ニ而送る、しようゆ三たるも一同ニ

送ることかつまた二頼む

○駅通御改正後之先触之写

静岡分
沼津迄
人足継立帳
静岡藩
沼津病院御取扱
林梅仙

紙 表

四月四日

出立

(ママ)
病津病院御用取扱

印 十三等二準シ候者

林梅仙

從静岡

沼津迄

静岡藩印

印

乗駕籠壹挺 八貫目

此人足三人三分

印

両懸壹荷 柳六貫五百目

同老八八分

静岡

午四月四日 御改所印

○同相対人足之帳

相対人足繼立帳

静岡藩

林梅仙

相対

一切俸駕籠壹挺 九貫五百目

此人足四人

静岡

午四月四日 御改所印

四月十五日陰 □三日出之静岡書状今夕ひきやくや今届く、且□□□□

□□延着

一金拾四兩と錢七百八十文 二月十二日今同廿日迄三月三日今同七日

迄之諸入用一日金三分永百五十文ツ、と沼

津之入足賃十四貫七百八十文懸合□□

右調役山下今受取候ニ付兼而申置候ことく刀の柄包之代其外ニ静岡ニ落手之事申来る

一山村今之書状来る其内ニ坪井行書状も入り有之て其書状ニ身分落着なきこと申来る格堂フチ米渡り方さし支へさる様ニ申来るニ付早速右之段坪井ニ懸合之書出す

一見付宿ニ而山村所持之山つ、き二老町五反程の立木なき山うり物ニ出候而代金ハ二十五六兩ニ可有之と持主は分散同様之次第故金ハ急き可申と申来り候故好地と見込候ハ、取入呉候様申遣し候金子も沙汰次第送り可申段申遣す

同十六日朝大雨午后晴 今朝静岡ニ書状并ニ糺四郎夏羽織地を飛脚や今出午后文周今書状来る別紙之通り申来る

元小十人歩兵差図役並

小林文周

其身一代御藩籍ニ御差加へ被成下三等勤番組被 命御扶持方三人扶持被下候尤向後勤功ニ寄り而者永世御藩籍入被 命候

右之通平太殿被達候間此段申渡す

同十九日晴 静岡送り船廻し荷物二十ばん勝又今長右衛門船積込ミ清水湊三保や源七まで送り出タス但送り状添○此便上乘致候而静岡まで参り候人有之候ニ付其人ニ托し送り状見合之帳面并ニ糺四郎洗張かたひら一反おたつ文を頼ミ送る

一東京利助江書状を出しおたつ榎本母ニ送る紙包を其内ニ包□届方頼ミ遣ス

同廿日晴廿一日同廿二日同廿三日陰

同廿四日陰今日者 三位様沼津御着但御管轄地御廻覧として廿日静岡御立紀も御供○廿四日早朝綾雄殿今達書来る

御用之儀有之候間 御着前ニ御本陣ニ罷出可被居候

右奉畏候之請書を出たす○御本陣ニ罷出候処 三位様御直渡御書付

林洞海

右之者今般奏任官江御登庸相成候間至急上京可被申付候也

四月十三日 弁官

静岡藩知事殿

今度依 召東京江罷越候儀大儀ニ候入念可申もの也

○四月廿四日便ニ山下巖分送り来る書付之写

初度御出張廿六日之内

金貳十三兩壹分貳朱と永二十五文 二月十二日迄三月七日まで日数

二十六日分日当

錢七十三貫四百五十八文

二月十二日沼津迄遠州路往返人

足川越賃錢とも

メ金三十兩貳分貳朱と錢五百七十八文

此請取訳之

右請取済

二度目出張□日之内

金九兩也 三月廿日受取 遠州懸川御用十日分日当

錢四十五貫七百□□文 四月十三日受取 同断人足賃

右之通請取相済○残り三月□□より廿日迄四月二日迄五日まで都合八日

分日当金七兩三□□と拾貳文外ニ沼津より之人足賃は近日受取候積りニ

御座候

同廿五日陰

同廿六日晴先触人足帳共勤番組頭白戸砂手許ニ而取計呉候ニ付明廿七日

出立之積り

休 泊

廿七日 箱根 小田原

廿八日 大磯 藤沢

廿九日 程ヶ谷 川崎

朔日 品川 東京

○路用金白戸分来る分百兩かつまた分受とる

内 一金壹兩也 供人万吉ニ渡す

但貳兩貳分之内

一同五兩也 此内三兩沼津渡し二兩箱根渡し 道中人馬賃錢用

として万吉ニ渡す

一同壹朱 錢にくづす

一同廿七日晴夜雨曉二字半起出四字出門六字前八分三鳥ニ来り六字二三
島出立十一字箱根の油屋某ニ而昼飯

再たひは越しと思ひし箱根山こゝろありけに鳴不如婦

夕四字三十分小田原新三笠や着泊り

一金壹兩也 万吉ニ渡す

一同廿八日雨晴朝四字起出五字出立五字四十分酒匂川越六字十九分

立場小休七字前川立場小休七字三十二前梅沢立場小休九字三十三分藤沢

ニ来る十字十分平塚ニ来る十一字四十二分南郷昼休十二字五十五分小和

田小休一字四十分田畑小休二字三十分藤沢来□□字廿五分斎田小休四字

一里山小休四字三十五分戸塚宿着倉屋文左衛門泊

一金壹兩也 万吉ニ渡す

一同壹兩也 蚕化堂江の土産料

同廿九日晴 三字起立四字出立五字柏尾小休 字神奈川十字川崎ニ来

一金壹兩也 万吉ニ渡す

惣メ八兩之内ニ金壹兩と錢五百文余残り受取

十一字山本ニ而昼飯十二字三十分浜川小休 字早川繼立

メ四字少し前下谷新屋敷佐藤家ニ着

此分拾兩三分と永 六月八日白戸分受取

一錢五十五貫七百貳十四文 沼津分品川迄人足五人六分品川分

東京まで五人七分と酒匂川々越賃

一金五兩壹分貳朱と壹貫五分 四月廿七日沼津出立分五月三日迄

日数六日之日当但一人一日三分と
永百五十文

二口メ金拾両三分三朱と三百四十八文

五月朔日晴 赤松桐原二行○夕刻伊東赤松来る

同二日晴藩邸二届ニ出る届書并ニ改名書共ニ朝倉藤十郎ニ渡す公用方ニ届る○大槻拙童堀越三沢伊東唐からしやを訪ふ○榎本のお母朝来る云今日箱館ニ残り之人々皆板橋へ着依之出邸之節綱三郎六三郎榎本勇之助小杉雅之進等之事を朝倉藤十郎ニ尋ぬ分明ならず依之夕刻又書簡ニ而尋遣す

一菓子一折 榎本老母

一蒲焼□□ 佐藤淡翁

一肴一折 佐々木東洋

一菓子一折 同東溟

一菓子一折 伊東大典医

一送り人万吉今朝出立ニ付書状を遣す○夕刻又朝倉ニ使遣し候処尚未分明依之明朝遣し候得心ニ而書状を認

同三日晴 今朝朝倉藤十郎使を遣す六三郎箱館ニ逗留之事丈ヶ分る○青木大典医来る同行池の端ニ行写真を横山ニ頼む六日ニてきる約束

同四日晴 朝同藩之鈴木寿揃同行某朝御用済帰宅○松本綱三郎 来る○午后東校ニ出る○夜中ニ静岡行沼津行之書状認る

同五日晴田辺青山三宅山本赤松静岡藩邸豊津藩邸内大城戸ニ行十字ニ帰宅○今朝沼津静岡ニ書状をいたす○静岡沼津の書状を鈴木真之助へ受取

元は備後福山の家来足輕○先年来

元吉助事

榎本釜次郎ニ奉公一昨年共ニ脱走

大畑伝一郎

箱館ニ行此度 ニ逢而東京ニかへ

三十五才

る○五月序の節ニ奉公○一ヶ年奉

公金十二両

夜中伊東大典医来

同六日陰雨田口成庵来る元恭庵と云野州佐野之人十年已前之塾生なり方今東校南塾句読師○猿渡健斎鮎をくれる○高階伊東青木佐藤と舟行○赤松使茶をおくり来る○三宅之後家玉子をくれる○静岡今書状来る中二山村之書状あり

同七日晴今朝沼津ニ書状を出す其内ニ静岡の書状もあり皆返書なり○はしめて東校ニ出勤二字半ニかへる○夕刻宮原中の宅ニ行○南洋ニ手紙をいたす返事来る○上野の山のほとりを過けるに子規の鳴をきゝて落かへり鳴音はつきし留魂上野の山の木の間かくれに

同八日晴 青木同道南洋を訪ふ

同九日晴 午后相良弘庵を訪ふ○正源となり清水茂平之妻を診す○足立益之助母子を訪ふ

同十日陰 午后松本二行き一泊山東一郎林正十郎二面会

一金三百疋 喜藏十日分雇之代

一同毫両 家令大畑伝一郎二五日分遣す但月々金毫両ツ、

一同三両三分毫朱と式朱五分 綱三郎差入れ候書物代分利助二払

錢四百十六文

一同式両式分 松本之肴代

一同式両毫分 □□□はかたメリンス一丈

同十一日陰朝松本へ帰る静岡へ八日附書状来る○午后赤松ニ行赤松云集議院御用懸ニなると○堀田政次郎二会

一金毫両式分式朱 写真十三枚

同十二日晴 朝東溟作楽戸痴驚近松平要を訪ふ○午后川上万之丞と山下浅草散歩○大博士大丞と拙老在勤中取扱之心得を尋ぬ云吏務も兼候事勿論之事万上坂之上岩佐と相談之事

同十三日晴東校□□□午后榎本勇之助伊東大典医を訪ふ共不逢○昨日川上万之丞来る□□浅草散歩○□しやを登坂之供ニ約束

同十四日雨 東校出勤○朝榎本勇之助来るおたつ之文を受とる即日返書した、め飛脚や二いたす○肥前中原駅の深川謙斎分書状来る○関口権助分綱三郎之事ニ付手紙来る○夜中綱三郎横浜印鑑之事主人ニ談す

同十五日雨 東校出勤○山本少貞 甚蔵来る○柳下容斎之伴貞橘来る○章達之伴章斎ニ面会致し度旨伝言す

同十六日晴 朝川上万之丞の宅に至る○静岡分宅状来る○午后主人同道ニ而小石川御薬園ニ行き帰路上田藩の岩間半弥ニ行妻之不快を診す○夕刻伊東大典医来る十八日夕に伊東ニ行く約束をなす○山村之書状の返書ニ山地壺町六反歩代金二十五両開発代金壺町ニ付五拾五両即壺町六反ニ而八十八両程茶の実五石代金貳十両雜費十両合メ金百四十三両又畑地代金百丈二日合メ貳百四十三両而買取呉候様頼ミ遣し代金ハ東海道上坂通行之節ニ持参り可申旨申遣し其旨をおつるにも申遣し早々山村へおくり候様申付一對となし明十七日飛脚や二いたす

同十七日晴 今朝静岡ニ飛脚を出たす

一金拾五両 足立益之助母ニのし付ニ而利助を頼ミ為持遣す受取書来る但昨十六日なり

一錢壺貫百廿四文 下村ひん付十本 内壺はん二本 二はん五三はん

三

一綱三郎分返書来る云横浜三十九番重国医へボンに従学右之通願出ス○荒井賢蔵五月十二日神奈川ニ而病死候段申来る○夕赤松内田ニ行書画をミる葛氏之黒山水王石谷之染渲山水等也

同十八日陰風 朝高階大典医宅ニ行き九段ニ至り招魂社の景場を一見し青木大典医之宅ニ行き昼前かへる○夕刻伊東ニ行き一泊

同十九日陰風 朝九一に行写真夫レ分東校ニ出勤○午后井上右八今は四海や静□来り云明後日出立陸路静岡ニ行依て沼津ニ写真入書状壺通を頼ミ静岡ニは紀ニ添書を遣す

一金拾壺両三分 夏袴地ニツ仕立代共

一同壺両貳朱 黒紹割羽織染代仕立代共

同廿日晴 朝赤松ニ行来六月朔日出立と約束す○鈴木真之助之築地ニ而浜御庭の隣元名護屋藩の下屋敷方今蒸気車鉄道局屋敷内の住居を尋ね新之助の新居を賀す

一金貳百疋 新之助新居祝肴代

一午后沼津十四日出之書状来る道中川支ニ而遅着之由断有之おたつ之榎本母鈴木姉行書状其内ニあり

同廿一日晴主人之家ニ而小集高階伊東青木来る盛宴也朝川上万之丞方ニ行

同廿二日晴 静岡分来状来る鈴木行之書入組有之○根室洞斎分書状来る○静岡沼津の返書認め明廿三日出タス洞斎之返書并馬島春庵の書状認む同廿三日晴陰 朝榎本勇之助来る静岡鈴木分之書状を渡す○赤松大三郎方ニ行○岩佐行之書状箱館馬島行之書状を主人ニ托す

同廿四日雨 出校権大丞ニ□□□大坂之大意をきく○坪井島村ニ逢而同断岩佐之申置之話を□□□道中人馬先触人足帳道中御手当家族引纏□□手当并六七両月官禄の事を頼む

廿五日陰 朝島村昂甫ニ行○東校出勤○五六両月分官禄三百二十四両受取

一三百十両 本博多帯地壺筋

一金貳分 手拭地壺本

一同貳朱 そめかへさし

同廿六日陰朝赤松青木を訪ふ○青木佐藤と共二三河屋ニ行西洋料理ニ而昼を致す○夕刻川上万之丞来る

一金五十両 さくら形筆十対

一同貳朱 料理代割合

同廿七日晴朝伊東猿渡小島ニ行き東校ニ出仕候

一白紹羽をり地壺反 高階伊東青木分錢別として来る

一大坂迄旅行道中入用合メ支度金家族引越共金貳百七十八兩ニ永廿五	
一紗羽をり地	佐藤大博士今来る
同廿八日晴 朝赤松ニ行東校出勤○午后宍戸三郎駆通司ニ懸合之事ニ而	
来る○夜両国川開き花火あり○夜半過ニ両国向河岸之木屋今出火河岸通	
り川下之方ニ中村やまで焼る会向院前岡田や与兵衛すし田舎そは等一円	
焼ける○三須文蔵来□	
同廿九日晴き□町松平要人ニ行く午時かへる	
一金壹分三朱	紳六郎綬七郎脇さし壺本ツ、
一同貳朱	さほん三ツ入壺箱
一同三朱と五文	松平三穂土産之茶代
一此度東海道登坂之泊り付先触ニ出し候分	
東京 七り	神奈川 一り九丁 程ヶ谷
小田原	沼津 蒲原
静岡	日坂 浜松
御油	鳴海 桑名
関	石部 伏見
大坂	
一官禄之内正米五石四斗四升三合八勺五六兩月分払代金四十四兩三分と	
六分六厘蔵宿分受取○今日人馬帳受取る	
同三十日 今日東校分先触を品川ニ為持遣す宍戸三郎受持也○東校より	
会計行之書状并ニ高安丹山拜命書入之二通受取○昼前東校ニ出勤坪井島	
村宇都宮二面会三宅ニも面会して帰る○大丞の宅ニ行不在	
今日惣金六百四十壹兩三分	
内	
一金拾八兩	匂精好壺匠
一同貳兩貳分	但紹羽をり地壺反添 佐藤肴代
一同壹兩	下男下女
一同五兩	
道中用伝一二渡す	
一同壹兩	伝一六月給金
一同貳分	兩人四日小遣
六月朔晴払曉東京出発正午神奈川さんくり堂ニ来り同地昼飯主人と同船	
横浜ニ来り伝一郎荷物駕付而程ヶ谷ニ泊す	
一金五兩	佐藤肴代
一同貳分貳朱	三沢山六の子供并ニ佐藤下女
一同三兩三分貳朱	西洋料理
一同貳分	□□テロコニー ビールコック
同二日晴夜雨午后二字過横浜出立四字頃程谷伊豆や三四郎方ニ至り伝一	
郎を召連れ七字戸塚宿くらや文右衛門ニ泊る○朝永田家見宅を訪ふ	
一金貳分	横浜のはるの兄に
一同貳分	伊豆や三四郎江
一同貳分	はるのおは江
同三日陰朝五字戸塚出立正午大磯昼飯夕正五字小田原着中松や午助方ニ	
泊る○平塚ニ而松村煉真宅を訪ふ	
一金壹兩	伝一郎二渡す
一同三兩	同断
一同壹分	煉真江肴代
同四日陰朝三字小田原出立十字箱根十二字山中ニ而昼飯夕四字沼津ニ帰	
宅	
一金十五兩也	右者赤松の留守宅にと、け遣ス
但し赤松今来る分ハ糺四郎の用ニ赤松ニかへし此十五兩者手本	
分渡す	
同五日同六日同七日	
同八日	
一金拾兩三分	四月廿七日御用召ニ而東京ニ罷出候人足五人分并

廿七日今五月三日迄七日分日当金白戸分受取る

同九日雨

同十日晴静岡行船荷十 及び大坂行船荷十 □□勝亦重三郎分

清水湊の三保や源七ニ送る○おたつはる兩人西かつ亦ニ暇乞ニ行○今朝
白戸砂ニ家地証書二通を渡し且置附道具書付之帳を渡す但其内たんすは
かし置○家作ゆつり代金二百五十両と定る

同十一日

同十二日晴熱朝十字頃分城中矢櫓失火○川村半鈴木与兵衛田村英齋方ニ
行

同十三日雨晴今日愈明後十五日発足之先触を問屋場ニ出タス

同十四日晴昨夕赤松帰る糺四郎之事を頼ミ承知す

壺ケ月入用食衣とも金五両別ニ小遣壺両と定む

一金拾五両也 糺四郎入用先日赤松の留守ニ渡す

一同十両也 今日同入用ニ而赤松ニ渡す

一同三分也 □□代佐藤ニ遣す分お貞ニ渡

一同四両也 煉の代としてお貞ニ渡す

一同十両也 道中入用伝一郎ニ渡す

一同壺両式分也 伝一郎鶴吉日当十五日今廿八日□中二日除き

十二分渡す

一□□并ニ土屋口入金合メ三百六十五両及び白戸之家代金之残り百五拾
両又かつ亦土屋之利足二十両三分式朱合メ五百廿三両壺分式朱受取其内
四百五十両一包となす

一金壺両也 大工手間代

一同四貫四百文 かつ亦払

同十五日陰雨朝正六字沼津出立原の植松ニ立寄り十二字過吉原着千代本
昼飯□吉と大工是分かへる一字過吉原出立四字半過蒲原□着□□蔵ニ
泊る

一金拾両也 道中入用伝一郎ニ渡す

同十六日雨蒲原出立江尻ニ而昼飯静岡伝馬町松崎や着寿丸伝一郎鶴吉を
やとやニ残し余は皆紀方ニ行く

同十七日大雨終日不出

一金拾両也 静岡ニ而いたす

同十八日晴三位様名倉福しまや一堂様戸塚ニ行く

同十九日晴正午静岡出立夕六字田中の藤枝ニ着 や泊上下五人也○

おたつは静岡ニ止りおなみ者静岡ニのこる○糺四郎今朝沼津の赤松之方
ニ出立菊蔵供致す

一金五両也 糺四郎用意金道中金

一同拾両也 於静岡伝一二渡す

同二十日晴朝五字藤枝出立夕五字二十分袋井宿おもたかやニ泊る着直ニ
山村惣三郎ニ書状を出たす

一同拾五両也 昨夜藤枝ニ而伝一郎ニ渡す

同廿一日陰朝六字袋井出立十字見附台の宮崎ニ立寄山村松風の主人と一

同新規買入之山地并畠地一見宿内の江戸やニ而昼飯右山地鼻の事件相談
相済金貳百十五両相渡し証書等ハ山村ニ頼ミ静岡紀の宅ニ分簿ニ預ケ置

十二字過出立夕五字三十分ニ浜松大米やニ止宿

同廿二日陰 朝四字浜松出立八字舞坂上船十字新居着

一金拾両也 昨夜伝一郎ニ渡す

辰ニ而昼飯昼後元白須賀村百姓伊三郎宅ニ寓居之長谷川信之助ニ立寄香
典式百疋并被頼候書状相渡す四字三十分ニ吉田ニ着升やニ泊る

一金拾両也 吉田駅ニ而伝一郎ニ相渡す

同廿三日晴熱 朝六字出立藤川ニ而正午昼飯午后三字二十分岡崎着伝馬
町大津や泊り夕雷鳴微雨

同廿四日晴熱朝四字三十分岡崎出立十一字せんど立場昼飯同三字三十分
宮着脇本陣小出ニ泊る

同廿五日晴 朝六字熱田乗船午后二字桑名着直ニ発足夕六字式十分四日市着本陣清水ニ泊る	一金五両也 大雅箋紙壹本
一金拾両也 昨廿四日夜於宮伝一郎ニ渡す	一同壹両三分壹朱 金巻墨梅幅仕立直し并ニ箱代共
同廿六日晴熱 朝五字四日市出立正午亀山昼飯四字坂下着山形や和兵衛方ニ泊る夕刻纔雨	一同三両也 二はん唐紙式朱
一金拾両也 於坂下伝一郎ニ渡	一同式分三朱 查士標字幅仕立直し并ニ存城斎額仕立直し
鈴鹿山谷のうしろの音にぞ鳴振にしことを思ひ出つ、	一同式分壹朱 帆利黒竹二幅仕立
同廿七日晴熱朝四字三十分出立正午水口昼飯夕四字二十分石部着ゑひすやニ泊る	一同式両式朱也 桃花村莊図巻軸仕立代
一金拾両也 於石部伝一郎ニ渡す	一同五両壹分 大雅箋紙壹本九十六枚
是ニ而九十両包の口終り也	一同式両壹分式朱 表装用の切地四品
同廿八日晴熱 朝三字三十分過石部出立一と立場ニ而丁ちん引く正午ニ大津ニ来り昼飯荷物懸改め済ミ但乗駕一丁人足不用之事ニ付駅通之大祐奥村某ニ面会書付を受取る夕六字過伏見着京樽小道具や弥五郎方ニ止宿明日之船之事相談相済	一同式両三分 梅屋の書樂人之幅壹軸
同廿九日晴熱朝七字伏見出船午后正三字大坂八軒屋浜着いつミやニ泊るいつミや主人云已ニ岩佐今申付有之	一同五両壹分式朱 高村君墓誌帖一帖唐人諸逐良老子西昇絶一帖
鈴木町 病院	同七月廿二日 山添送り男帶地二筋
病院御構内 岩佐之寓	未七月廿一日 辛未七月十五日渡
南本町壺丁目鈴屋茂平 林之寓	一金式分式朱也 鉄翁四季山水扇面表装仕直し、稼圃書半切物表装仕直し代
病院書生寮賄方用達 三河屋宇七	一同三分 蠟石三顆代白玉堂
七月二日晴熱朝七字出勤岩佐権大丞宅ニ行面会夫分病院ニ出勤十一字退散東校用状四通共渡す○和蘭今新教師先日着	同八月四日 遠州茶園開拓入用金山村ニ送る当分勝手金の金不都合ニ付取替置
エルメレンス廿六才 二ヶ年頼也 月給四百トル来春今四百五十トル	同八月七日 漢装用新規織立雲形りんす二巻但壺巻之丈ケ式丈あり故に壺尺の代六金ニ而拾両壹分式厘五毛
書画諸道具	同八月八日 蕙雁の文晁の墨画一幅
	一金壹両式分

一金壹両貳分	山中静逸淡海魁堂山添快堂三人の画軸漢製代ナリ	一銀百三十式匁	鷲印拾本
同		同	
一同三分	査士標字軸漢製直し代	一同百三十式匁	天香源字拾本
同		同	
一同貳朱	皆川淇園松風閣の額うら打はり付直し	一同四十四匁	復記佳製拾本
十一月八日		同	
一金四両貳朱也	白羽二重一反代	一同四十四匁	□京式拾本
十一月八日		同	
一同貳両三分壹朱也	上木綿花壹貫五百目代	一同八十八匁	明月餅拾本
十一月廿八日元方々かへし二付受取		メ□四百四十匁	
十一月□□		□□□三分三朱也	漱金墨三挺
一金壹両也	頼支山書壹枚神山鳳山之書壹枚之挨拶	惣メ金五両壹分壹朱と貳匁五分	
同		付落し二付追加之分	
一同壹両也	桃花村莊画卷題辭神山頼天江宮原四家分	一金壹分壹朱	静岡送り快查之画牡丹之画壹幅漢装代
同廿日		一同壹分壹朱	同洞海之書軸漢装代
一同三分也	野間元琢初代之書卷一ツ、大雅堂大字二行物一軸	一同四両貳分	子宮鏡一具
同日		一同三拾両壹分壹朱と四匁	羽をり裏地おミほおなみ紐八郎之送り 衣ふく代惣メ
一同壹両貳分也	小林卓斎を訪ふ土産料	一同三分三朱也	丹波亀岡行都合三度の往来入用
十一月廿九日今氏弘		一同貳拾両也	東京送り四人分手当九月分来申正月分迄金 五十両之内不足分二十足し別
一同七両也	菰翁松芝之幅代	□月	
同日		一同拾両也	豊津県士小井塚守三ケ用立
一同壹分壹朱	枸櫞油壹瓶代	□月八日	
同日		一同貳両也	端溪鈴滝山館硯壹面
一同貳朱と三百文	吸玉代	同日	
一同貳分貳朱	唐筆三箱代	一同壹両也	象牙三ッ入レ子卯材、但外紫上箱共
十二月二日			

同日	右象牙印三顆両面刻料	同月廿九日	鈴瓏山館研の上箱
一同貳分也		一同壹朱錢貳百文	百蟹墨解図巻漢装代
十二月十一日		一同壹分貳朱	新貨幣書代
一同三分	玉露上物玉様小半斤	一同壹分□つり百文	東京新聞紙
同日		一□□貫貳百文	紫旦染印材箱壹ツ
一同貳分三朱二半減	濃茶上物宝来八分斤	一金壹兩貳分貳朱	紫旦染印材箱壹ツ
壹分壹朱と三百七十六文		メ金百八十貳兩貳朱と七十六文	
同日		春秋二口メ	
一同壹兩三分	紫ちりめん	金貳百二十兩壹分三朱と七十六文	
十二月廿三日		内金八拾貳兩貳朱	洞海小遣
一同壹兩	玉の印材 山雲、成立 一顆	同九十一兩貳分貳朱	茶園入用静岡入用其外
十二月廿六日		同十八兩	藥種医器入用
一同貳兩三分	曼珠院什聖教書一帙		
同日		明治五壬申年	
一同壹兩壹分	同断草聖蹟訣一帖箱入	正月七日	茶代 壹斤壹兩貳分之二茶、發会入用
辛未		一金壹分	
十二月廿六日		正月八日	
一金壹兩貳朱	ポトヒリ子壺瓶	一金拾兩貳朱と錢五百文	發会入用十七人分料理酒飯雜費共
同十二月廿八日		同日	
一同貳分	ドーフルス散壺瓶	一同三分	紫旦之石台
同日		同日	
一同壹分貳朱	唐筆之代	一同貳分と錢六百文	牛肉六斤發会入用
同十二月廿八日		正月	
一金七兩貳分反物代	山添氏おくり物	一同貳兩也	菓籠壹ツ 且紫旦口
浅草のり五帖		同日	
同日		一同壹兩貳分壹朱	メリヤスちゅばん壹、同も、引二ツ
一同貳兩貳分	同家払物女もの唐りんす	同日	

一同三両貳分と錢八百文	白フラ子ル長サ貳丈百四間		
二月十六日		壬申四月十二日	
一同貳兩三朱也	黒帽壹ツ毛櫛壹ツ写真挟壹ツ□□□□	東京転移後	
二月十六日		四月廿二日	
一同七兩也	葵章の黒サヤ衣表代二ツ	一金五百疋	川上冬崖ニ贈る
二月十八日			
一同三分也	山中静逸東行之錢別		
二月廿日			
一同貳兩壹分也	くし払箱、但上はこ共代		
二月三十日			
一金五兩也	ぬめ一旦		
三月十五日			
一金三分貳朱	快堂墨梅之讃題詩春邨鳳陽 三人之挨拶		
同廿日			
一同三分	水精材印刻料		
同廿日			
一同壹分貳朱	阿部川石之磨き料		
同廿日			
一同壹分貳朱	たかやさん木刀之修繕料		
三月十八日			
一同拾五兩也	竹田之憲画瓶梅一ふく水仙二石の画一ふく之代		
三月十九日			
一金壹兩壹分	春塘之画々帖小紙十三、葉の画料		
一同貳兩也	香谷之画々帖小紙十三葉		
メ金五拾八兩三分壹朱と錢貳拾五文			
内 一貳拾九兩貳分壹朱也	洞海小遣		
一貳拾九兩一朱と錢壹貫九百文	勝手入用		

(国立歴史民俗博物館研究部)
(二〇〇九年三月二六日受付、二〇〇九年五月八日審査終了)